

新制國語讀本

卷十

375.9  
Da19  
資料室

41517

教科書文庫

4
810
41-1938
200030
1529

810  
1529

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C  
Y  
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8  
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

2 1 20 6 8 7 9 5 4 3 2 1 10 6 8 7 9 5 4 3 2 1 0

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5  
JAPAN  
Tajima



昭和三十一年一月二十一日

文部省檢定濟

中學國語教科書實用・中學國語教科書

新制國語讀本

大學博士 佐佐木信綱 編  
大學博士 武田祐吉

湯川弘文社

375.9  
Sa 19

新制國語讀本

大學博士 佐佐木信綱 編  
大學博士 武田祐吉

湯川弘文社

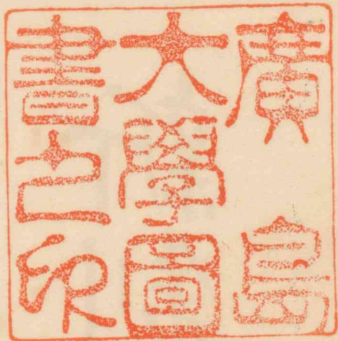
弘文社



筆穂百福平



磯荒





新制國語讀本 卷十

目次

一	近世に於ける都會の發達と文學	編者	藤井乙男	一
二	元祿文壇の三文豪		藤井乙男	八
三	鮎賣八助		井原西鶴	一五
四	千里が竹		近松門左衛門	一八
五	俳諧生活		藤村作	二六
六	蕉風			三〇

目次

一



一	大竹藪	〔俳句〕	三
二	初しぐれ	〔猿蓑〕	三
七 俳文選			
一	四季	上島鬼貫	三
二	澁笠の銘竝に序	松尾芭蕉	三
三	十八樓の記	松尾芭蕉	三
四	銀河の序	松尾芭蕉	三
五	幻住庵の記	松尾芭蕉	三
八 近世國學と日本精神			
九 契沖の學問			
		久松潜一	四
		村岡典嗣	五

一〇	物まなび	本居宣長	五
一一	すがのあら野	〔和歌〕	五
一二	防人日記	青柳種信	六
一三	用財論	貝原益軒	七
一四	滑稽文學の雙璧	編者	八
一五	現代の文學	編者	八
一六	五重塔	幸田露伴	九
一七	鹽原	尾崎紅葉	一〇
一八	あゝ大和にしあらましかば	薄田泣菫	一一
一九	東京の開化	島崎藤村	一二



二〇	表現せざる表現	志田義秀	二三
二一	日本戯曲の三形式	伊原青々園	三元
二二	美術に現れた日本國民性	藤懸靜也	二五
二三	國民的文學の發達	土居光知	二五
附録			
一四	日本文學年表略(近世—現代)		



# 新制國語讀本 卷十

## 一 近世に於ける都會の發達と文學

編者

徳川家康が幕府を江戸に開いてから、永い間の戦争に倦んでゐた人心は、漸くこゝに文化の世界に安住して、爾來三百年の泰平と共に、華やかな近世文藝の展開を迎へるに至つた。時代當初の殺伐な世情を鎮靜しようとする方針から、幕府は大いに文教を奨励し、書籍の出版も漸く盛んになるに連れて、文字を知る者の範圍も亦従つて廣まつて行つた。從來、公家・僧侶・武士の間に限られてゐたかの觀のあつた文學の作者も、この時代に入つては漸次町人社會に及び、殊に大阪・江戸の如き新興の大都會に於て、文學の發達を



見るに至つた。京は桓武天皇奠都以來の帝都として、永く文學の中心境となつてゐたが、その久しきに及んで遂に沈滞の氣を生じ、纔かに廷臣の間に舊套を追ふ文藝が弄ばれるに過ぎなかつた。これに反して、大阪灣に面した地方は、西國との水運を擁して商業的都市の發達を見、その住民には富有な者が多く、生活にも餘裕を生じたので、新興の文藝は多く此處から起つた。初めは和泉の國の堺港が、物産集散の中心地として榮え、近世文學の萌芽も此處に生じたが、次いでその繁榮は攝津の大阪に移り、これに伴つて時代を代表すべき文藝は、多くこの地に勃興するに至つた。

大阪は、古く難波の京と呼ばれ、一時帝都となつたこともあり、その後、西國への水路を扼して、海陸の衝をなしてゐた。豊臣秀吉が城を築いてから、都邑の姿漸く整ひ、江戸時代に入つては、商運隆

一時帝都云々  
仁徳・孝徳・聖武  
の諸天皇の朝に  
一時都を遷され  
たことをさす。

淀川  
桂川・宇治川・木  
津川の諸流を  
集めて大阪市を貫  
ぐ。流し大阪灣に注  
ぐ。

伏見  
京都市伏見區伏  
見

井原西鶴  
浮世草子作者。  
俳人。元祿六年  
歿。年五十二。  
一三〇一—二  
三五三

浮世草子  
江戸時代に當時  
の世態・人情を  
寫し出したもの。

近松門左衛門  
浄瑠璃作者。巢  
林子と號した。  
享保九年歿。年  
七十二。一七三  
一—一七九四

御伽草子  
室町時代に起つ  
た説話を平易に  
敘述したもの。  
作者未詳。

昌にして物資ゆたかに、人々は早く亂を忘れて華美な生活への一  
路を辿つた。堀江は縦横に通じて、これに架せる四百橋、橋下の水  
は直ちに西國・南海の海運を通じ、淀川の流は、一夜の舟を浮べて、京・  
伏見の夢を齎し來る。歴史ある文學の後を承けて、新興の藝能に  
華やぐには、誠にふさはしい地であつた。  
かくて近世文學の華は、まづ大阪の地に開く。元祿期を代表す  
る井原西鶴の浮世草子、近松門左衛門の浄瑠璃の如き、その尤なる  
ものである。西鶴は大阪の町人、談林の俳諧より出でて、世態を描  
き人情を道破するに、辛辣な觀察と、洗煉した行文とを以てした。  
在來の御伽草子・教訓小説の類は、一轉して人間の生活を赤裸々に  
描く小説となり、遠く明治時代の小説興隆に大きい影響を與へて  
ゐる。近松は公家に仕へた武士の果かと云はれてゐる。操り人  
形と結んで、これが爲に浄瑠璃を作つた。浄瑠璃は、安土・桃山時代



十二段草子  
牛若丸を主人公  
として淨瑠璃に  
語られた物語

山崎宗鑑  
本名志那範重  
連歌師。俳人。  
天文二十二年  
歿。年八十九。

荒木田守武  
俳人。天文十八  
年歿。年七十七。  
二〇三三三二  
二〇九

松永貞徳  
俳人。承應二年  
歿。年八十三。  
二〇三三三二  
二〇九

西山宗因  
本名豊一。俳人。  
談林の一派を立  
てた。天和二年  
歿。年七十八。  
二〇三三三二  
二〇九

下河邊長流  
通稱彦六。大和  
の人。貞享三年  
歿。年六十三。  
二〇三三三二  
二〇九

契沖  
下川氏。攝津の  
國尼崎に生れ、  
十一歳の時出家  
した。元禄十四  
年歿。年六十二。  
二〇三三三二  
二〇九

荷田春滿  
國學者。神官。  
元文元年歿。年  
六十八。(二三  
九六)

平田篤胤  
出羽の國秋田の  
人。氣吹廻舎と  
號した。天保十  
四年歿。年六十  
八。(二四三六  
二五〇三)

に行はれた十二段草子を初めとし、近松に至つて構想詞章共に發達して、優れた作品を多く出した。その時代物は武家の義理を描いて、道義に於て勝り、世話物は町人の生活を寫して、人情の曲折を盡してゐる。

西鶴・近松とほゞ時代を同じうして松尾芭蕉がある。伊賀の上野の人で、江戸に出て正風の俳句を創めた。俳句はもと俳諧の連歌の發句の獨立したもので、はやく山崎宗鑑・荒木田守武があつて、連歌を俳諧に取做して一風を開き、爾來これを學ぶ者相繼ぎ、松永貞徳・西山宗因等、各、その一派を成した。然るに芭蕉に至つて、從來の諧謔を主とする風調から歩を轉じて、閑寂を愛し、自然の懷に立還つたのである。

荒茫たる武藏野の原の、漸く海に盡きなむとし、丘陵と林野と錯綜し、入江と沼澤とこれを繞れる處に建設せられたのは江戸の城

市である。幕府の所在地として諸侯は交代勤仕し、田舎武士のこれに従うて出府する者多く、氣象おのづから武伐であつて、文學の華の開けたのは、上方に比して較、後れた。しかも來るべき者は遂に來つて、關東平野の物産を擁して著實なる商業の發達を見ると共に、文學も亦尙古の思想より出發した和歌俳句の道を先に、輕妙洒脫を旨とする新興の文學を後にして、近世後期に於ける文學の中心は、漸次上方を去つてこの地に移つた。

是より先、元祿時代に大阪に下河邊長流・僧契沖があり、次いで京師に荷田春滿があつて國學を主唱し、幕府の漢學を以て道を立てるに對立したが、荷田門の賀茂眞淵は遠江から江戸に出で、古風の歌をよくして、勝れた作があり、その門下から學者歌人を出すこと多く、京師の歌人香川景樹の一派と共に、近世歌壇の大勢を支配した。國學者としては、眞淵門に伊勢の本居宣長、宣長門に秋田の平



田篤胤があり、春満・眞淵と併せて四大人と稱せられる。

式亭三馬  
本名菊地久徳。  
文政五年歿。年  
四十八。（二四三  
五―二四八二）  
稗史小説  
歴史・傳説・民間  
の瑣事を記した  
小説。

鶴屋南北  
四世鶴屋南北。  
本名鶴屋伊之  
助。文政十二年  
歿。年七十五。  
（二四一五―二  
四八九）

文化・文政期を中心として、繁華なる江戸の市井の間に興つた文藝は、諧謔を喜び、明快輕妙であつて、思想的に見るべきものは無いが、亦泰平の産物として時代を飾るものがある。十返舎一九の東海道中膝栗毛、式亭三馬の浮世風呂、浮世床などは、その代表作として、よく人の頤を解く。これに對して曲亭馬琴は、稗史小説に筆を染めて、よく因果應報の運命を説いてゐる。南總里見八犬傳、椿説弓張月の如き、その代表作とすべきである。演劇は、古代より有つたものと信ぜられるが、近世に入つて特に發達し、後期に至つてその構成は大成し、脚本にも鶴屋南北の作の如き、見るべきものを産出した。但し多くは題材を武家の時代に取つて、これに町人の生活を織込み、事件は紛糾して、いまだよく人間の個性を描くに至らなかつた。

要するに近世の文學は、前期は上方地方を中心として、人間の弱點を衝き、人情の葛藤を描くことに勝り、後期は江戸を中心として、おほむね快活を喜び、勸善懲惡の道理を説くことに汲々としてゐる。而してその作者が僧侶を去つて、文筆に富んだ武士、及び才氣のある町人の間に移り、讀者も亦従つてその層を主としたのは、やがてその作品の風趣をして、一層平易なものたらしめた理由とすべきであらう。すべて大都會の發達に伴ふ産物であつて、衆人和樂の氣が、おのづから充満してゐるものである。



## 二 元祿文壇の三文豪

藤井乙男

藤井乙男  
號は紫影。文學博士。國文學者。京都帝國大學名譽教授。帝國學士院會員。兵庫縣の人。明治元年生。

元祿  
東山天皇の御代の年號。(二三四八―二三六三)

季吟  
姓北村。國學者。和歌・俳諧をよくくした。松永貞徳・安原貞室に學ぶ。寶永二年歿。年八十二。(二二八四―二二八五)

談林  
西山宗因の開いた俳風。貞徳門流の方式を排除して、自由な俳諧を始めた。延寶頃には人氣に投じて遂に貞徳門流を壓倒して、名聲を馳せた。

元祿時代は、我が文學史中で最も光彩ある時代で、種々の方面に人物の打揃うて輩出したことは空前といふべきである。中にも、井原西鶴、松尾芭蕉、近松門左衛門の三人は、その尤なるものである。三人の中で、西鶴が一番年長者で、芭蕉はこれより二歳若く、近松は又芭蕉より九歳下であつたが、その事業の世に現れたのは殆ど同時といつてよい。しかも、此の三人が京・大阪・江戸と三方に分れ、それが又小説・俳諧・戲曲の三方面に、各、革新の事業を企てて、いづれも立派に成功して、その歴史に新紀元を開いたのも面白い現象である。

芭蕉は早くから俳諧に親しみ、或は季吟の門に學び、或は談林の風を慕うてゐたが、四十一歳の時に至つて、遂に一流を開いた。そ

笠きて云々  
野ざらし紀行に、年暮れぬ笠きて草鞋穿さながら」とある。

蕉風  
芭蕉の開いた俳風。正風ともいふ。

貞門  
松永貞徳の開いた俳諧の門流。

れから死に至るまでの十年間は、大抵行脚に出て、笠きて草鞋はきながら年を暮し、自然と同化して幽玄閑寂の思想を養ひ、一日も修養を怠らぬと共に、到る處にその道を傳へて後進を誘掖したので、門人は天下に満ち、終に蕉風即ち俳諧、俳諧即ち蕉風といふ有様となつた。貞門・談林の徒が遊戯視した俳諧は、芭蕉によつて極めて眞面目に、厳格な態度を以て取扱はれ、最早駄洒落や輕口・頓智のいひ放しでなく、詩歌と同等の内容をもち、それと對等の位地を占めるに至つた。宗因の、

世の中や蝶々とまれかくもあれ  
には、輕快な浮世を茶化した一種の詩趣はあるが、芭蕉の、  
起きよ起きよ我が友にせん寝る胡蝶  
に至つては、眞摯な人情の溫味が出てゐるではないか。

芭蕉は和歌・連歌の因襲的趣味に囚はれず、汎く詩材を求め、新に



詩境を開き、和歌連歌に用ひられた材料でも、一種新しい見方で鑑賞して、著しく俳諧の内容を變化せしめたのみでなく、形式に於ても、談林の無法則をも主張せず、さりとして貞門の法式にも拘泥せず、まづ一通りは法式に據るものの、必要に應じては、これを打破して束縛に甘んじなかつた。芭蕉の俳諧は、高雅であり、獨特の趣味の上に立つて居るから、眞にその趣味を解して之を味はふには、その道の修養を積まなければならぬ。暇つぶしの慰みにする俳諧、それもあつてよいけれども、芭蕉のめざす所は決してそんなものではなかつた。

西鶴と近松との二人は、丁度芭蕉が連歌や貞徳派の俳諧の束縛を脱して、新しい詩境を開いたのと同様に、これまでの古い文章や古い型を破つて、端的に社會人間を寫さうと企てたものである。西鶴は始め、談林の驍將として大阪に住んでゐた。彼が四十一

點者  
他人の和歌・俳諧などに批點を加へる人。

近古小説

平安時代文學の系統を追つた擬古物語、及びお伽草子と稱する婦女子の讀物がある。



井原西鶴

歳の時に初めて小説に筆を染めたが、元來西鶴の才は特に世態人情を寫すと云ふやうな方面に適して居たので、その作品は全く目新しい趣向である上に、文章は多年俳諧で鍛へあげた、腕の冴えた、簡潔な力の籠つたものであつたから、非常な喝采を博した。それで乘氣になつて、小説の方に熱中して居る中に、蕉風が次第に盛んになつて、談林の林に秋風が吹きそめたので、遂に本職の點者の方は疎かにして、小説家として身を終へるに至つたのである。

西鶴の鋭利な觀察や簡勁な文章は、眞に我が文學史中に獨歩すべきものである。元祿以前の近古小説は、まだ純粹の小説らしい體裁をなして居ないで、如何にも古臭い趣向を、古臭い文章で型の



浄瑠璃

室町時代末期既に、その名稱があり、始めは浄瑠璃姫物語を扇拍子で語り、慶長頃には、三味線で伴奏することが始まり、又人形に仕掛け、或は舞踊を伴なひ、或は全然音曲として行はれるやうになつた。

幸若の舞

物語を音曲に合はせて、扇拍子に大小の鼓を用ひて舞ふもの。室町時代後半から江戸時代の寛文・延寶頃まで行はれた。

都萬太夫

越後掾と稱した。浄瑠璃語り。京都の人。

如く極り文句の形容澤山に述べたに過ぎなかつたが、西鶴が出て、昔の型や極り文句を排斥して、當時の言葉を以て當時の社會を寫し、生氣潑刺たる新小説を作り出して當時の文壇を風靡した。これが西鶴の偉大な所以である。

西鶴以前の小説が詰らなかつたと同様に、近松以前の浄瑠璃も殆ど見るに足らぬものであつた。幸若の舞曲や御伽草子のやうなものに、少しばかり修正を加へて語られてゐたが、次第に新作も出るやうになつた。しかしそれとても、孰れも室町時代の物語風の系統を引いたものであつて、荒唐無稽な英雄談や神佛の靈驗話に過ぎないで、現實の生活とは殆ど無關係な夢のやうなものが多かつたのである。其の作風を一變したのが近松である。

彼が二十五歳の時、都萬太夫座の爲に脚本に筆を染めて大喝采を得て以來、幾多の歌舞伎狂言を作ると同時に、井上播磨掾や宇治

井上播磨掾・宇治加賀掾

共に寛文頃の浄瑠璃語り。

義太夫

竹本義太夫。姓は藤原、名は博敬。義太夫節の始祖。正徳四年歿。年六十四。(三三一一一—二三四)

古浄瑠璃

竹本義太夫以前の浄瑠璃。これ以後を新浄瑠璃といふ。舞曲本。幸若舞の詞。

加賀掾等の爲にも浄瑠璃を作つて與へた。義太夫が大阪に下つて竹本座を創立するに方つて、近松は「出世景清」の新作を與へて、出世の二字に前途の幸多からんことを祈つた。此の頃、近松はまだ京都に住んで居たが、ついで大阪に下り、元祿十六年五月、世話物の初作に大當りを得てからは、全く大阪に定住して、専ら義太夫の爲に思を凝らし筆を走らせて、年々幾多の新曲を出し、遂に百餘篇の多きに及んだ。その世話物も時代物も、義太夫の妙舌と相俟つて、浄瑠璃をして浪花名物の随一たらしめたのである。

西鶴の小説は、最初から成功して居るが、近松は寧ろ西鶴よりも芭蕉の方にその進歩の順序が似て居る。芭蕉の俳諧が、最初貞門や談林に彷徨うて居たやうに、近松も最初の間は古浄瑠璃の眞似をやつて居た。中には舞曲本や謠曲の丸取りのやうな所もあつて、とかく物語風に流れて、戯曲の體裁を具へず、時間空間の移り變



りにも極めて無頓著なことをやつて居た。これ等の短所をすっかり除き得て、立派な戯曲の出来るやうになつたのは、芭蕉と同じやうに四十歳を過ぎてからである。

以上の三人は、其の人物性格に於てもそれ／＼違つて居り、又活動した方面も違つて居るが、孰れも元祿文學に新機運を導いて、從來の面目を一新した人々である。傳襲的の舊套を打破して古い型に依らず、前人の思想を其のまゝに借り來ることをもせず、自己の見聞感得に基づいて眞實を寫した點に於て相一致して居る。

即ち芭蕉は天地四時の情景を寫し、西鶴は現實の社會の表裏を暴露し、近松は義理・人情の曲折を描いたのである。傳襲的思想形式を排斥して、新しい文學を起したと云ふことが、此の三人の偉大な所以である。

（江戸文學研究）

### 三 鮎賣 八助

井原西鶴

昔から今に、同じ顔を見るこそ可笑しき世の中。此の二十四五年も奈良通ひする肴屋ありけるが、行くたびに只一色に極めて、鮎より外に賣る事なし。後には人も鮎賣の八助とて、見知らぬ人もなく、それ／＼に商の道附きて、ゆるりと三人口を過ぎける。されども大晦日に錢五百持つて、終に年をとりたる事なし。口喰うて一盃に雑煮祝うた分なり。此の男、常々世渡りに油斷せず、一人ある母親に頼まれて、火桶買うて來るにも、はや間錢取りて只は通はず。まして他人の事には、産婆呼んで來てやるけはしき時も、茶漬飯を喰はずには行かぬものなり。如何に欲の世に住めばとて、念佛講仲間の布に利を取るなどは、誠に死ねがな目くじろの男なり。これ程にしても彼のざまなれば、天の咎めの道理ぞかし。そもそ

口喰うて云々  
くちすぎ以外に  
餘裕のないこ  
と。  
間錢  
アヒセン。手數  
料の意。  
死ねがな目くじ  
ろ  
死んでくれたら  
よい、そしたら  
目までくじり取  
つてやらうとい  
ふ意で、貪欲非  
道の意味の諺。



も奈良に通ふ時より、今に鮎の足は日本國が八本に極まりたるものを、一本づつ切つて、足七本にして賣れども、誰か是に氣のつかぬ



事にて賣りける。其の足ばかりを、松原の煮賣屋に、定まつて買ふ者あり、さりとは恐しの人心ぞかし。物には七十五度とて、必ず顯るゝ時節あり。過ぎつる年の暮に、足二本づつ切つて、六本にして

物には七十五度  
どんなに隠して  
も、七十五度目  
ぐらゐには顯れ  
るといふ諺

手貝の町  
今の奈良市手貝  
町

忙しまぎれに賣りけるに、これも穿鑿する人なく、賣つて通りけるに、手貝の町の中程に、表に菱垣したる内より呼込み、鮎二盃賣つて

やら裾の枯れたる鮎」と、足の足らぬを吟味し出し、これは何處の海より揚がる鮎ぞ。足六本づつは神代このかた何の書にも見えず。不便や、今まで奈良中の者が、一盃くうたであらう。魚屋、顔見知つた」といへば、此方のやうなる大晦日に碁を打つてゐる所では賣らぬ」と云分してぞ歸りける。その後、誰が沙汰するともなく世間に知れて、さる程に狭い所は隅から隅まで、足切り八助と云ひふらして、一生の身過の留る事、これおのれが心からなり。(世間胸算用)

世間胸算用  
小説。五卷。井原  
西鶴の作。



### 四千里が竹

近松門左衛門

船路の末も知らぬ火の筑紫は雲に埋めども、あとに應護の神風や、千波萬波を押切つて、時もたがへず親子の船、唐土の地にぞ著きにける。鄭芝龍一官は、故郷へ歸る唐錦、裝束引きかへ妻子に向ひ、「我が本國といひながら、時移り代變り、天下悉く李蹈天が引入れに、韃靼夷の奴となり、昔の朋友一族とて、誰を尋ねんやうもなく、司馬將軍吳三桂が生死のありかも知れざれば、何を以て義兵の旗を擧げ、何處を一城に立籠るべき處もなし。然るに某、去んぬる天啓五年、此の國を立ちのき、日本へ渡る時、二歳になりし娘の子を乳母が袖に捨ておきしが、その子が母は産落して當座に死す。かくいふ父は、八重の汐路の中絶えて、いつ父母も知らぬ身が、育てば育つ草木の、雨露の恵に長ずることく、天地の父母の助にや、成人して今、

親子

鄭芝龍夫妻と、その子鄭成功。

李蹈天

明朝の奸臣。韃靼に内應して明帝を弑した。

吳三桂

明朝の忠臣。

天啓五年

明の熹宗の代。(西曆一六二五)

娘

錦祥女。

甘輝

明の將軍。韃靼に降つたが、間もなく鄭芝龍に應じた。

和藤内

鄭芝龍の子。鄭成功、又、國姓爺ともいふ。

潯陽の江

今、九江といふ。支那江西省の開市場。

赤壁

支那湖北省にある。

東坡

支那宋代の詩人。名は軾。東坡は號。(一六九六一七六一)

五常軍甘輝といふ大名、一城の主の妻となるよし、商人の便に聞及ぶ。頼む方はこればかり。親を慕ふ心ありて娘さへ承引せば、鞞の甘輝もやすくと頼まるべし。これより道の程百八十里、打連れては人も怪しめん。我一人道をかへ、和藤内は母を具し、日本の漁船の吹流されしと、頓智を以て人家に憩ひ、追ひつくべし。これより先は音に聞ゆる千里が竹とて虎の栖む大藪あり。それを過ぐれば潯陽の江、これ狸々の栖む處。風景聳えし高山は、赤壁とて、昔、東坡が配所ぞや。それよりは甘輝が在城獅子が城へは程もなし。その赤壁にて待揃へ、萬事を示しあはずべし。と、方角とても白雲の、日影を心覺えにて、東西へこそ別れけれ。教に任せ、和藤内、人家を求め忍ばんと、かひなくしく母を負ひ、たづきも知らぬ岩巖石、古木の根ざし、瀧つ波、飛越えはね越え、飛鳥の如く急げども、末はてしなき大明國、人里絶えて廣々たる千里が竹



ほうど  
殆ど

虎嘯けば  
淮南子に、「虎嘯而谷風至、龍舉而景雲屬」とある。

楊香  
晉の人。十四歳の時赤手で虎を捕へて父の難を救つたといふ。

に迷ひ入る。和藤内、ほうど我をぬかし、なう、母ぢや人、此の臍骨に  
覺えたり。もう四五十里も來ませうが、人にも猿にも逢ふ事か、行  
けば行く程藪の中、うむ、分つたり、方角知らぬ日本人、唐の狐がな  
ぶるよな。魅さば魅せ。宿なし旅の行きつき次第、小豆の飯の相  
伴。」と、根笹、大竹押分け、踏分け、尙奥深く行くさきに、怪しや數萬の人  
聲、攻鼓、攻太鼓、喇叭、ちやるめら、高音をそらし、ひやうくとこそ聞  
えけれ。「すは我々を見咎めて、敵の取巻く攻太鼓か、又は狐のなす  
わざか。」と、茫然たるその折節、空凄じく風起り、砂を穿ち、どうど  
う、竹葉さつと巻立て、巻立て、吹折る竹は劍の如く、凄じなんどもお  
ろかなり。  
和藤内ちつとも臆せず、讀めたり、讀めたり。さては異國の虎狩  
な。あの鉦太鼓は勢子の者。こゝは聞ゆる千里が原。虎嘯けば  
風起る、猛獸の所爲と覺えたり。二十四孝の楊香は孝行の徳に因

かこうて  
〔かこみて〕

西天  
サイテン。西天竺の略。印度のこと。  
畏れつべう。  
〔畏れつべく〕

つて自然と逃れし惡虎の難。その孝行には劣るとも、忠義に勇む  
わが勇力。唐へ渡つて力始め、神力ますく、日本力。刃で向ふは  
大人氣なし。虎はおろか、象でも鬼でも一挫ぎ。」と、尻ひとつからげ身  
繕ひ、母をかこうて立つたるは、西天の獅子王も畏れつべうぞ見え  
てける。  
案に違はず、吹く風と共に荒れたる猛虎の形、節根に頬を摩りつ  
け、摩りつけ、岩角に爪磨ぎ立て、二人を目がけいがみ懸るを事とも  
せず、弓手に撲り、馬手に受け、振つて懸れば身を交し、撓めばひらり  
と乗移り、上になり下になり、命競べ根競べ、聲を力にゑい、  
虎の怒り毛、怒り聲、山も崩るゝ如くなり。和藤内も大童、虎も半分  
毛をむしられ、兩方共に息疲れ、石上に突つたてば、虎も岩間に小首  
を投げ、大息ついたるその響、輔吹くが如くなり。  
母、藪蔭より走り出で、やあ、和藤内。神國に生れて神より受



身體髮膚  
孝經に、「身體髮  
膚受之父母、  
不敢毀傷、孝之  
始也。」とある。

尾筒

尾のつけねの圓  
くふくれたとこ  
ろ。

天の斑駒

素戔嗚の尊が天  
の斑駒を逆剝に  
せられた故事。

風來人

笑壺に入る

けし身體髮膚、畜類に出合ひ、力立てして怪我するな。日本の地は  
離るゝとも、神はわが身にいすゝ川、大神宮の御祓、納受などか無か  
らんや。」と、肌まもの護符まもりを渡さるれば、「げに尤も。」と押戴き、虎に差向け差  
上ぐれば、神國神祕のその不思議、猛りに猛る勢ひも、忽ち尾を伏せ  
耳を垂れ、じりゝゝと四足を縮め、恐れわなゝき岩洞に匿れ入る。  
尾筒を攫んで跳ね返し、打伏せゝ、怯むところを乗つかゝり、足下  
にしつかとふまへしは、天の斑駒、素戔嗚の尊の神力、天照す神の威  
徳ぞ有難き。  
かゝる所に勢子の者群り来るその中に、大將と覺しき者大音あ  
げ、「やあゝ、うぬはいづくの風來人、我が功名を妨ぐる。其の虎は  
忝くも主君右將軍李蹈天より韃靼王へ献上のため、狩出したる虎  
なるぞ。早々渡せ。異議に及ばば打殺さん。しやくわん、しやく  
わん。」とわめきけり。李蹈天と聞くよりも、願ふ所と笑壺に入り、「や

餓鬼も人數  
俚諺に、「餓鬼も  
人數、膝とも談  
合。」とある。

あ、餓鬼も人數、しをらしい事ほざいたり。身が生國は大日本。風  
來とは舌長し。さほど欲しがる虎ならば、主君と頼む李蹈天とや  
ら、石花菜いしかんさいとやら、茲へ突出し詫言させい。ぢきに逢うて用もある。  
さもない内はいかなこと、ならぬ。」とねめつくる。「やあ、物な言  
はせそ。討取れ。」と一度に劍をはらりと抜く。「心得たり。」と護符まもりを  
虎の首にかけ、母の側に引据うれば、繋ぎし如くに働かず。「おゝ心  
易し。」と太刀差翳し、群る中へ割つて入り、八方無盡に割りたて割り  
たて、撫でまくる。

勢子の大将安大人、官人引具し立歸り、「おのれ老耄おぼ餘さじ。」と一文  
字に切りかゝる。猶も神明應護の驗、神力虎に加はつて、むつくと  
起きて身震ひし、敵に向ひ齒を鳴らし、猛りうなりて飛びかゝる。  
「こはかなはじ。」と安大人、勢子の者が差いたる劍けんかり鉾こ數鎗すうしやう、手にあ  
たるを幸に、投附け投附け打ちかくる。虎は神力自在を得、劍を宙



に引つくはへ引つくはへ、岩に打當て、微塵になす。刃の光、玉散る霞、氷を碎くに異ならず。打物盡くれば、官人ども、色めき立つて逃げまどふ。後より和藤内、どつこい遣らぬ。」と顯れ出で、安大人が素首を掴んで差上げ、くるくると振廻し、ゑいやつと打ちつくれば、岩に熟柿を打つ如く、五體ひしげて失せにけり。

此の勢ひに官人ばら、後へ戻れば、惡虎の口、先へ行けば和藤内、仁王立に突つ立つたり。「あゝ、申し御堪忍。御免、御免。」と手を合はせ、土に喰ひつき泣きゐたり。和藤内虎の背を撫でて、「うぬらが、小國とて侮る日本人、虎さへこはがる日本の手竝を覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官が倅、九州平戸に生長せし和藤内とは我が事なり。先帝の妹宮梅檀皇女にめぐり逢ひ、三世の恩を報ぜん爲、父が故郷へ立歸り、國の亂を治むるなり。さあ、命惜しくば味方につけ。否といへば虎の餌食。否か、應か。」と詰めかくる。「なう、

平戸

肥前の國(長崎縣)北松浦郡平戸島平戸

梅檀皇女

大明十七代莊烈皇帝の皇妹

月代

サカヤキ。男子の額から頂にかけて髪を剃ること

何の否で御座りましよ。韃靼王に従ふも、李蹈天に従ふも、命が惜しき。向後お前の御家來ども、お情頼み奉る。」と地に鼻つけて畏まる。「おゝ、出來した出來した。さりながら、我が家來になるからは、日本流に月代剃つて元服させ、名も改めて召使はん。」と、差添の小刀外させ、是も當座の早剃刀、母も手々に受取つて、竝ぶ頭の鉢の水、揉むや揉まずに無理無體、片端剃るやらこぼつやら。絲鬢、厚鬢、剃刀次第、瞬く隙に剃りしまひ、二櫛半のばらけ髪。頭は日本、髭は韃靼、身は唐人、互に顔を見合せて、頭冷つく風引いて、「噯々、村雨、村雨。」と涙を流すぞ道理なる。

親子どつと打笑ひ、揃ひも揃うた供廻り、名も日本に改めて、何左衛門、何兵衛、太郎、次郎、十郎迄、面々が國所、頭字に名乗り、二行に立つてぼつ立てろ。「承り候。」とお先手の手振の衆、ちやぐちやう左衛門、東蒲塞、右衛門、呂宗、兵衛、東京、兵衛、暹羅、太郎、占城、次郎、ちやるなん四郎



國姓爺合戦  
鄭成功の史實を  
素材とした戯  
曲、時代物。

藤村 作  
文學博士。國文  
學者。東京帝國  
大學名譽教授。  
福岡縣の人。明  
治八年生。

ほるなん五郎うんすん六郎すん吉九郎もうる左衛門ぢやが太郎  
兵衛さんとめ八郎いぎりす兵衛、今参りのお供先跡に引馬、虎斑の  
駒、母を助けて孝行の名を取り、口取り、國を取る、譽は異國、本朝に踏  
跨げたる鞍、鐙、虎の背中に打乗つて威勢を千里に顯せり。

(國姓爺合戦)

### 五 俳諧生活

藤村 作

俳諧は室町時代からあつたものであるが、其の時代の俳諧は、滑  
稽遊戯の文學であつた。寂の文學としての俳諧は、元祿時代の松  
尾芭蕉から始まると云つてよい。尤も、寂の由來を求むれば、源泉  
は遠い。其の遠い源泉から絶えぬ流が續いてゐるので、必ずしも

芭蕉に始まつたものではない。けれども、此處に俳諧の特質、其の  
根柢に在る俳諧生活の特質としての寂の特性を考へるには、芭蕉  
からで十分である。俳諧の寂の特性を知るには、芭蕉の俳諧の性  
質を調べてみなければならぬ。之を知るには、芭蕉の生活を調べ  
ねばならぬと思ふので、芭蕉を中心として、寂は如何なるものかと  
いふことを考へよう。

一言にして芭蕉を評すれば、彼は人格的な詩人である。芭蕉の  
一代の創作を讀んで見れば、彼がはじめの頃、貞門の俳諧を學んで  
居た時は、低級な遊戯的の俳諧家であつたが、その晩年の大成期に  
至る迄に、彼の藝術は數度變化した。これは比較的變化に富んだ  
彼の生涯の間に、彼の人格が磨かれて、次第に偉大をなしたのに伴  
なつて、洗煉されて、大成の域に達したものと考へる。  
彼の生涯が、人格の大成、生活の眞意義を求めて怠らなかつた生



無能無藝云々  
芭蕉の吉野紀行  
に「無能無藝に  
して、只此の一  
筋につながる。  
西行の和歌にお  
ける、宗祇の連  
舟の繪におけ  
る、利休の茶に  
おける、その貫  
通するものは一  
なり。」とある。

涯である如く、彼の一代の藝術にも、努力の跡を留めて、一步一步高  
く大きくなつて來てゐるのを見るのである。芭蕉の學殖や禪の  
修養といふことが、彼の人格と俳諧とを大成する上に助けたこと  
は疑ないが、彼の日常の生活そのものが、またそれ以上に與つて有  
力のものであつたことは、十分知り得られると思ふ。彼の藝術に  
は、常に彼の人格の光が射し、努力の痕が見えて居る。そこに普通  
の俳人の作品と較べて、遙かに侵し難い權威の、我等に迫つて來る  
ものがある。彼は嘗て、晩年に近く自分自らの生活を顧みて、無能  
無藝にして此の一筋に繋がる。」と云つてゐる。此の一筋と云ふの  
は俳諧である。藝術である。この意味は、唯生活の方便として、止  
むを得ず俳諧の藝術に携はるといふ淺薄のものではない關係を  
いふのである。彼自身の生活と藝術との間にもつと密接の關係  
を保つことをいつたものである。其の密接な關係といふは、一言

にしていへば、心を俳諧にするといふことである。

此の二つのものは、彼にとつては偶然の關係に立つものではな  
く、寧ろ必然的な、離さうとしても離されない深い關係に立つもの  
とされたと思はれる。彼にとつては、俳諧を作るといふことが、確  
かに彼の生活の方便でもあつたけれども、藝術の創作に彼が携は  
つたことは、同時に彼自身の生活を作り上げて行くことであり、又  
彼の人格を大成して行く道であつた。彼の俳諧の特質の寂は、獨  
り彼の俳諧の特質でなく、彼の生活の特質であり、彼の人格の光で  
あつたと考へられるのである。

(上方文學と江戸文學)

六 蕉 風



六 蕉 風

一 大 竹 藪

芭蕉  
 ほととぎす大竹藪を漏る月夜  
 五月雨をあつめて早し最上川  
 清瀧や浪にちり込む青松葉  
 しづかさや岩にしみ入る蟬の聲  
 此の道や行く人なしに秋の暮  
 枯れ枝に鳥のとまりけり秋のくれ  
 名月や池をめぐりて夜もすがら  
 名月や門にさし来る潮がしら  
 菊の香や奈良には古き佛たち

最上川  
 源を山形・福島  
 縣境にある吾妻  
 山北陰に發し、  
 北流して山形新  
 庄の盆地を経て  
 酒田港に注ぐ。  
 本邦三急流の  
 一。  
 清瀧  
 京都市西部。大  
 堰川の上流。高  
 尾・榎尾・榎尾の  
 谷間を流れる清  
 流。

去來  
 向井氏。俳人。蕉  
 門十哲の一人。  
 肥前(佐賀縣)の  
 人。寶永元年歿。  
 年五十四。(二三  
 一四二三三六  
 四)  
 其角  
 寶井氏。蕉門十  
 哲の一人。江戸  
 の人。寶永四年  
 歿。年四十七。  
 (二二二二二二  
 三六七)  
 嵐雪  
 服部氏。蕉門十  
 哲の一人。江戸  
 の人。寶永四年  
 歿。年五十四。  
 (二二二二二二  
 三六七)  
 丈草  
 内藤氏。蕉門十  
 哲の一人。尾張  
 (愛知縣)犬山侯  
 の重臣。後、隱遁  
 した。寶永五年  
 歿。年四十五。  
 (二二二二二二  
 三六四)  
 凡兆  
 金澤の人。本名。  
 死年未詳。  
 惟然  
 廣瀬氏。蕉門の  
 俳人。美濃(岐阜  
 縣)の人。正徳五  
 年(二三七五)歿。

秋深き隣は何をする人ぞ  
 初しぐれ猿も小蓑をほしげなり  
 旅人と我が名よばれむ初しぐれ  
 旅に病んで夢は枯野をかけ廻る  
 應々といへど叩くや雪の門  
 夕立や家をめぐりてあひる鳴く  
 黄菊白菊その外の名はなくもがな  
 大原や蝶の出で舞ふおぼろ月  
 ほととぎす鳴くや湖水のさゝ濁り  
 鷺の巢の樟の枯枝に日は入りぬ  
 ながくと川一筋や雪の原  
 水鳥や向うの岸へつうい  
 叱られて次の間に立つ寒さかな

去來 其角 嵐雪 丈草 凡兆 惟然 支考



支考  
各務氏。蕉門十哲の一人。美濃(岐阜縣)の人。享保十六年歿。年六十七。(二三二五—二三九一)

史邦  
五雨亭と號した。俳人。芭蕉の門人。尾張(愛知縣)犬山の人。

猿蓑  
俳諧集。芭蕉七部集の一。

二 初しぐれ  
鶯の羽も刷ひぬはつしぐれ  
一ふき風の木の葉しづまる

去 來

股引の朝からぬるゝ川こえて

凡 兆

たぬきをおどす篠張の弓

史 邦

まひら戸に蔦這ひかゝる宵の月

芭 蕉

人にもくれず名物の梨

去 來

(猿蓑)

七 俳 文 選

上島鬼貫  
俳人。伊丹(兵庫縣)の人。元文三年歿。年七十八。(二三二—二三九八)

鶯は、聲めづらしき朝より、障子にうつる日影ものどやかに覺え、  
きのふけふ野山もけしきだちて、閉ぢたる水もおのづから流るゝ  
頃、聲も共によくほどけて、霞に伴なひ花に遊ぶ。又青葉が枝に囀  
る頃ぞ、ひたすら惜しき。  
蛙は、水の底にて鳴きそむるより、上に出でて雨戀ふる聲もあは  
れに、旅にあれば故郷の空なつかしく、あるは夜もすがら野になく  
聲の枕につたふ寢覺こそたゞならね。

柳は、花よりもなほ、風情に花あり。水にひかれ風に隨ひて、じか  
も音なく、夏は笠なうして休らふ人を覆ひ、秋は一葉の水にうかみ  
て風に歩み、冬は時雨におもしろく、雪にながめ深し。



瀬田  
近江の國(滋賀縣)瀬田川をさす、螢の名所。

桃の花は、櫻よりよく肥えてにこやかなり。  
梨の花は、ひそかに面白し。  
螢は、一つ二つ見えそむる軒端、夜道ゆく草むら、瀬田の奥に舟さし入れて花と見る柳の盛り。  
蟬は、日のつよき程、聲くるしげに、夕暮は寂し。又山路ゆく折節、梢の聲谷川におつるも涼し。  
蟲は、雨しめやかなる日、籬のほとりにおろく、鳴き出でたる、晝さへ物あはれなり。月の夜は月にほこり、闇の夜は闇にうもれず。あるは野ごしの風におのれ、が吹送る聲、いつ死ぬべしとも聞えねど、秋限る命の程ぞはかなき。つくねんとして夜も更け心も沈みて、何にこぼるゝとは知らぬ涙ぞ落つる。  
紅葉の頃は、きのふの雨にけふの梢を思ひ、けふ又あすの時雨を思ふ。時しも空定めなければ、打晴れて枝も葉も雫だちたるに、夕

其の里人の云々  
古今和歌集、壬生忠岑の歌に、「山里は秋こそ殊に怪しけれ鹿の鳴くねにめをさましつゝ」とあるによる。  
名にたてる山嵐山をさす。  
あからめなせそ金葉和歌集、源經信の歌に、「大井河いはなみたかし、筏士よ岸の紅葉にあからめなせそ」とあるによる。

日こぼるゝ風情こそ、色殊にうるはしけれ。遙かに遠山をのぞめば、耳にかよはぬ鹿の聲さへ心にうごきて、其の里人の目をさましけむ。夜々の寢覺を思ひ、あるは名にたてる山の嵐はげしき折節は、あからめなせそといひけむ。筏士がつりの袖も、いつしか錦にかはりて、おのが影さへ底に見ゆらむ。花は散るをいとへど、紅葉は散りてさへ眺をのこす。  
霞は、松にたまらず竹に聲もろく、地に落ちては米簸るに似たれば、雀鷄なんどの、まがへて嘴を費しけるもわりなく見ゆ。消ゆることは露よりも猶速かなれば、眺も亦共にいそがし。  
煤拂は、人の顔みな埃におぼれて、誰とも更に見えわかねば、聲を姿に呼びかはすもをかし。又置所わすれて、日ごろ尋ぬれども見えざりし物の出で、なんどしたるは、我が物ながら拾ひたる心地ぞする。



柳が枝に云々  
餅花をいふ。

獨ごと

鬼貫の俳諧・隨筆集。

妙觀が刀

徒然草に「よき細工は、少し鈍き刀を使ふといふ。妙觀が刀はいたく立たず」とある。妙觀は攝津勝尾寺の觀音の靈像を刻んだと傳へられる僧。

餅搗は、家々に其の日をたがへず、けふはあすはと親しき人々行きかはして、とりど、賑ふ中に、老いたる女の例知り顔に下知なんどしたる家は、物ごもりて見ゆ。又幼き人の柳が枝に餅むしり附けて花と見る喜びこそ、其の昔戀しくは侍れ。

二 澁笠の銘竝に序 松尾芭蕉

草の扉にひとりわびて、秋風寂しき折々、竹取のたくみにならひ、妙觀が刀をかりて、みづから竹を割り、竹を削りて、笠つくりの翁と名乗る。心静かならざれば、日を経るにも、ものうく、工拙ければ、夜を盡して成らず。且に紙を重ね夕に干して、又重ね重ねて、澁といふものをもて色をさはし、ます／＼堅からんことを思ふ。二十日過ぐる程にこそ、やゝ出で來にけれ。其の形、裏のかたに巻入れ、外さまに吹きかへりなど、荷葉の半ば開くに似て、中々をかしき姿なり。さらばすみがねのいみじからんより、ゆがみながらに愛しつべし。

宮城野の露云々

古今和歌集に、「みさぶらひ御笠と申せ宮城野の木の下露は雨にまさり」とあるによる。

吳天の雪云々

詩人玉屑の詩に、「笠重吳天雪、鞋香楚地花」とあるによる。

宗祇の云々

宗祇の句に「世にふるもさらば時雨のやどり哉」とあるによる。

和漢文操

各務支考の編、俳文を集む。

十八樓の記

貞享五年五月、芭蕉が近江(滋賀縣)・美濃(岐阜縣)を吟行した時の作。

長良川

岐阜縣の南部を流れて、木曾川に入る。

賀島氏

西行法師の富士見笠か、東坡居士が雪見笠か。本宮城野の露に供連れねば、吳天の雪に杖をや曳かん。霰にさそひ、時雨にかたぶけ、そぞろにめでて殊に興ず。興のうちにして俄かに感ずることあり。再び宗祇の時雨ならでも、假のやどりに袂をうるほして、みづから笠の裏に書きつけ侍る。

世にふるはさらに宗祇のやどり哉 (和漢文操)

三 十八樓の記 松尾芭蕉

美濃の國長良川に臨みて水樓あり。あるじを賀島氏といふ。稻葉山後に高く、亂山西にかさなりて、近からず遠からず。田中の寺は杉の一むらに隠れ、岸に沿ふ民家は竹の圍みの縁もふかし。さらし布所々に引きはへて、右に渡し舟浮ぶ。里人の行きかひしげく、漁村軒を竝べて、網を曳き釣を垂る。おのがさまも、たゞ此の樓をもてなすに似たり。暮れがたき夏の日も忘るゝばかり、



賀島落梧 芭蕉の門人  
稻葉山 岐阜市の東にある。長良川に臨む。

西湖の十の境 西湖十景をさす。平湖秋月、蘇堤春曉、斷橋殘雪、雷峯落照、南屏晚鐘、麴院荷風、花港觀魚、柳浪聞鶯、兩潭印月、兩峯插雲。

笈日記 三卷。俳句・俳文等を収めたもの。各務支考の編にかゝる。

遠流 フラン。罪により遠國・島嶼に流すこと。

入日の影も月にかはりて、波にむすぼるゝ篝火の影もやゝ近く、高欄のもとに鶉飼するなど、誠にめざましき見物なりけらし。かの瀟湘の八つのながめ、西湖の十の境も、涼風一味のうちに思ひためたり。もし此の樓に名をいはむとならば、十八樓ともいはまほしや。此のあたり目に見ゆるものは皆涼しきものなり。松尾芭蕉

四 銀河の序

北陸道に行脚して、越後の國出雲崎といふ所に泊る。彼の佐渡が島は、海の面十八里、滄波を隔てて、東西三十五里によこほりふしたり。峯の嶮難、谷の隈々まで、さすがに手にとるばかり鮮かに見渡さる。うべ此の島はこがね多く出でて、普く人の世の寶となれば、限りなきめでたき島にて侍るを、大罪朝敵のたぐひ遠流せらるるによりて、唯おそろしき名のみ聞えあるも、本意なき事に思ひて、

風俗文選 十卷。森川許六の撰。俳人の文章を編輯したものを編む。

石山・岩間・國分山 何れも大津市石山町にある。

國分寺 聖武天皇の天平十三年(一四〇一)諸國に令して國毎に分置せしめた寺院。

曲翠 本名定常。通稱外記。俳人。芭蕉の門人。膳所藩士。奸臣を斬つて自刃した。享保二年(二三七)歿。

窓押開きて、暫時の旅愁いたはらむとするほど、日既に海に沈んで、月ほのぐらく、銀河半天にかゝりて星きら／＼と冴えたるに、沖のかたより波の音しば／＼運びて、魂けづるがごとく腸ちぎれて、そぞろにかなしび來れば、草の枕も定まらず、墨の袂にゆゑとはなきて絞るばかりになむ侍る。あら海や佐渡に横たふ天の川、

五 幻住庵の記

石山の奥、岩間の後に山あり。國分山といふ。そのかみの國分寺の名を傳ふるなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登ること三曲二百歩にして、八幡宮建たせ給ふ。日頃は人の詣でざりければ、いとゞ神さび、物靜かなる傍に、住みすてし、草の戸あり。蓬根笹軒を圍み、屋根漏り壁落ちて、狐狸ふしどを得たり。幻住庵といふ。あるじの僧なにがしは、勇士菅沼氏曲翠子の伯父になむ侍りしを、



五十年稍近き身

元祿二年(一三三  
四九)四十六歳  
の時、奥羽を行  
脚した事をい

象潟

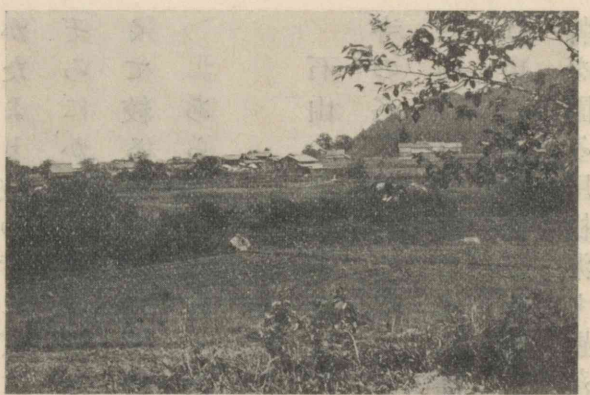
羽後の國(秋田  
縣)由利郡にあ  
つた名勝の地

今年

元祿三年(一三三  
五〇)

やがて出でじと  
云々

西行の山家集  
に、吉野山やが  
て出でじと思ふ  
身を花散りなば  
と人や待つら  
む」とある。



今は八年ばかりむかしになりて、まさに幻住老人の名をのみ残せ

でじとさへ思ひそみぬ。さすがに春のなごりも遠からず、躑躅咲残り、山藤松にかゝりて、

予亦市中を去ること十年ばかりに  
して、五十年稍近き身は、蕘蟲の蕘を失  
ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽象潟の暑き  
日に面を焦し、高すなご歩み苦しき北  
海分の荒磯に踵を破りて、今年湖水の波  
に漂ふ。鳩の浮巢の流れとゞまるべ  
き蘆の一本の蔭頼もしく、軒端葺き改  
め、桓根結ひ添へなどして、卯月の初め  
いとかりそめに入りし山の、やがて出

吳楚東南に走り  
云々

唐の杜甫の詩  
に、「昔聞洞庭  
水、今上岳陽樓。  
吳楚東南圻、乾  
坤日夜浮。」云々  
とある。

未申

ヒツジサル。西  
南

比良の高嶺

滋賀縣滋賀郡に  
ある。海拔一二  
二八米。

辛崎

同縣同郡滋賀村  
にある。

城

膳所城。

橋

瀬田橋。

笠取

山城の國(京都  
府)宇治郡笠取  
村にある山。

三上山

滋賀縣野洲郡  
湖水の東。

田上山

滋賀縣栗太郡下  
田上村にある。

時鳥しばし、過ぐるほど、宿かし鳥のたよりさへあるを、啄木鳥の  
つゝくとも厭はじなど、そゞろに興じて、魂、吳楚東南に走り、身は瀟  
湘洞庭に立つ。山は未申に峙ち、人家よきほどに隔たり、南薰峯よ  
りおろし、北風海を浸してすゞし。比叡の山、比良の高嶺より、辛崎  
の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣垂るゝ船あり。笠取に通ふ木樵  
の聲、麓の小田に早苗とる唄、螢飛びかふ夕闇の空に水鶏のたゞく  
音、美景物として足らずといふことなし。中にも三上山は土峯の  
おもかげに通ひて、武藏野の古き住家も思ひ出でられ、田上山に故  
人をかぞふ。  
猶眺望限なからむと、後の峯に這ひ上り、松の棚造り、藁の圓座を  
敷きて猿の腰掛と名づく。彼の海棠に巢を營み、主薄峯に庵を結  
べる王翁、徐侗が徒にはあらず。偶、心まめなる時は、谷の清水を汲  
みて自ら炊ぐ。とくゝの雫を侘びて、一爐の備へいとかるし。



故人 猿丸大夫。平安時代の歌人。傳記未詳。その墓が田上山麓にあると無名抄に見えてゐる。

海棠に巢を營む 山谷集に、徐老海棠東上。王翁主簿峯庵。とある。

とくくの事 西行の歌と傳へるものにとくくとくと落つる岩間の苔清水汲みほすほどもなきすまひかなしがあ

筑紫の高良山 筑後の國(福岡縣)三井郡にある。

賀茂の甲斐某 賀茂神社の祠官藤木甲斐守敦直書家慶安二年歿。年六十八。(二四二—二三〇九)

はた昔住みけむ人の、殊に心高く住みなし侍りて、たくみ置ける物ずきもなし。持佛一間を隔てて、夜の物納むべき處などいささかしつらへり。さるを、筑紫の高良山の僧正は、賀茂の甲斐某が嚴子にて、このたび洛に上り、いまそかりけるを、或人をして額を乞はしむ。いとやすくと筆を染めて、幻住庵の三字をおくらる。やがて草庵の記念となしぬ。すべて山居といひ、旅寢といひ、さる器貯はふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱に掛けたり。

晝はまれくとぶらふ人々に心を動かし、或は宮守の翁、里の男ども入來りて、猪の稻食ひ荒し、兔の豆畑に通ふなど、我が聞き知らぬ農談に、日既に山の端にかゝれば、夜座靜かに月を待ちては影を伴なひ、燈を取つては、岡兩に是非をこらす。かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡を隠さむとはあらず。やゝ病身人

佛籬祖室 惠能語録に、「吾三十而窺佛籬祖室。」

樂天は云々 唐の詩人白樂天の詩に、「詩役三

五臟神、酒泪三丹田。」

老杜は云々 唐の詩人李白の詩に、「飯顆山頭逢杜甫。頭戴笠子。日草午、爲問別來太瘦生、爲總爲從前作詩苦。」

に倦みて、世を厭ひし人に似たり。○中への中へ思つらへ年月の移り來し拙き身の科を思ふに、或時は仕官懸命の地を羨み、一たびは佛籬祖室の扉に入らむとせしも、たよりなき風雲に身を責め、花鳥に情を勞して、暫く生涯のはかりごととさへなれば、終に無能無才にして、此の一筋に繋がる。○樂天は五臟の神を破り、老杜は瘦せたり。○賢愚文質の等しからざるも、いづれか幻の栖處ならずやと思ひ捨てて臥しぬ。○まづたのむ椎の木もあり夏木立

(幻住庵の記)



久松潜一  
文學博士。國文學者。東京帝國大學教授。愛知縣の人。明治二十七年生。

### 八 近世國學と日本精神

久松潜一

我が國の藝術作品を通觀するに「まこと」を根柢として出發し、そして、終には又其處に歸つて來る事が見られる。どんな文藝作品でも「まこと」が無ければ人を動かすことは出來ない。唯文學には素材的な方面と内容的な方面とがあつて、素材としては非道德的なものも扱ふが、本質として扱ふ態度の上では、道德と矛盾せぬものとして表現する。近世の勸善懲惡主義文學でも、素材としては悪人の行動を敘述してゐるが、而も終局に於ては善を勸めるために是を取扱つてゐる。即ち、道德との一致に究竟してゐる處に本質がある。かういふ風に觀て來ると、文學は本質的に道德と一致すると共に、又、宗教とも一致融合するものであつて、斯かる見解の萌芽は近世國學に於ける眞淵等の考への中にも見られるかと思ふ。

近世國學の研究では、古文學の方面のみを對象としてゐるために、それだけでは日本文學精神の全貌を盡し得ないやうに見えるが、事實は是に依つて日本文學精神の根柢的なものを握み得てゐるのである。日本文學の精神、又は、もつと廣く見て、日本精神は、種の方面から考察することが出来る。國民性十論の中に現れてゐる日本精神觀は、達見であると思ふが、このやうに日本精神を十種の方面に別けて考へるならば、恐らく外にも各人各様の別け方が存するであらう。私も曾て日本精神を心構への方面と、實質的方面とに小別して十論を立てて見た事がある。心構への方面では、まこと物のあはれ、幽玄、平淡、傳統の尊重の五つ、實質的方面では、敬神、忠君、愛國家の尊重、武士道、義理の精神の五つである。此の分類は、なほ研究してみたいと考へてゐるが、その發展の根柢は、日本

國民性十論  
一卷。文學博士  
芳賀矢一の著。



精神の心構へとしては、やはり「まこと」を根柢とし、一方實質的な方面の根柢としては、日本建國の事實及び、それから來る理想としての敬神と忠君愛國とを擧げて見たい。我々が國では、敬神と忠君と愛國と此の三つが完全に一致し得るところに、民族性の大きな特色が見られるのである。信仰に就いて見ても、最高至尊の神は、日本建國の神としての天照大神にましまし、その御すゑの天皇は、即ち「あきつみ神」で、天祖の造らせ給うた御國をしろしめしてゐるのである。即ち皇祖神と、國家と、現人神としての天皇と、此の三位一體の境地が建國の事實であつて、それから來る理想が即ち敬神と忠君と愛國とであり、此の三つが又緊密に一致する所に、日本の強味が存するのである。古來、我が國では此の敬神・忠君愛國の一致の上にすべての根柢を置いて、今日までの發展を成して來たのであつて、精神の出發點も畢竟こゝに存

春滿

姓は荷田。國學  
四大人の一人。  
元文元年歿。年  
六十八。(二三三  
九二二三九六)

眞淵

姓は賀茂。國學  
四大人の一人。  
荷田春滿の門  
人。明和六年歿。  
年七十三。(二三  
五七一二四二  
九)

宣長

姓は本居。國學  
四大人の一人。  
眞淵の門人。享  
和元年歿。年七  
十二。(二三九〇  
一四六)

篤胤

姓は平田。國學  
四大人の一人。  
宣長の門人。天  
保十四年歿。年  
六十八。(二四三  
六一二五〇三)

するのであるが、此の三者の一致は、「まこと」と結びつく事に依つて生ずるのであつて、「まこと」に依つて敬神と忠君と愛國とが一つに成つた具體的の姿が、即ち建國の精神である。近世の國學に於ては、此の點を判然と闡明して説いてゐるのであつて、近世の國學が持つ意義及び價值は其處にあると私は考へてゐる。即ち春滿・眞淵・宣長から篤胤への過程、更にこれに契沖をも加へた近世國學の流の中心は、「まこと」を根柢として、敬神と忠君と愛國、神と國家と天皇との三位一體の境地が見られると云ふ點を、殊に明確に説いてゐると見たい。しかしかしてかくみる時、近世國學の説いてゐる精神が、日本精神及び民族精神の出發點をなし、且つ根柢を能く把握してゐることを認め得るのである。従つて、民族精神・日本精神の發展を、曾て近世國學が見出した以上に、今後の時代に於て、見出すことがあるとしても、その出發點は近世國學の中にあると見るべき



であると思ふ。

此の近世國學の把握したものは、一方から見ると、又、日本文學の發展の一切の原動力でもある。故に近世國學者の學的な業績は、我々の今日の日本研究の根柢であるのみか、同時に又その出發點として、いつの時代にも甦つて來るものであると考へられる。此の精神は、溯れば記紀萬葉の精神であつて、それが日本建國の事實、日本民族の理想を新しく自覺して出來たものと思はれるが、然も此の精神は日本文化の發展に或行詰りを生じた時に、いつも甦つて來るのである。鎌倉時代の初期、降つては又、近世の元祿時代には、文藝復興が見出される。此の文藝復興の主調とするところは、單に文學の勃興とか藝術の隆盛とかにあるのではなく、何處までも古典の精神に返つて、その基礎のもとに新しい文化を創造して行く事にあると思ふ。近世の文藝復興の例を見ても、それは古典

記・紀・萬葉  
古事記・日本書紀・萬葉集の略

元祿時代  
東山天皇の御代(二三四八—二三六三)

復興が根柢となつてゐる。記紀萬葉の精神に立返る事、換言すれば、「まこと」によつて敬神・忠君・愛國の三つが一つになつてゐる國家の、最初の姿に復歸するところに根柢を置いて、文學が榮えた、それが文藝復興の眞諦であると私は見たい。

最近の思想的な行詰りに對して新しく起つた日本精神運動も、これ亦日本古典の精神に立返つて、その根柢の上に新しい文化を打立てる所に、意義があると思ふのである。最近の國文學研究の復興を、單に古い事を研究するものとして輕視する人々もあるが、この研究の目的は、單に昔の事を學ぶのではなく、日本精神の出發點に返ることである。新日本の文化を新しく打立てる原動力根柢として、今一度古典の精神に立返り、古い中に新しいものを創造する運動として現れたのが、國文學研究の復興であると私は信ずる。新文化の創造は、かゝる根柢の上に立



つ事なしには、決して實現されるものではない。新しい發展のため、種々の文化を取入れることは必要であるが、出發點として此の必須なものを擱まねば、日本としての創造發展は不可能である。近世國學の起つた時の状態を考へると、やはり中世以後の文化から、今一度古事記、萬葉集の精神に返ることが出發點で、その上に新文化の開發が行はれ、やがて明治維新の實現をも見たのである。最近の日本精神運動も、その根柢は、近世國學興隆の精神と同一の精神に外ならないのである。

(萬葉集考説)

村岡典嗣

日本思想家。  
東北帝國大學教授。東京の人。明治十七年生。

### 九 契沖の學問

村岡典嗣

契沖の傳記に徴して注意されるのは、彼が決して一個の尋常なる僧侶でなくて、熱心な求道者であり、また眞摯な宗學者であつたことである。

第一に、彼が幼時出家を志したことに就いて見る。彼は近世初期、時勢變轉の犠牲となつて衰運に向つた武士の家に次男として生れ、七歳にして大患にかゝつた。その時彼は、菅神に祈つて病癒ゆるを得たが、同時に同神の託宣をうけて出家を志した。初めは父母が許さなかつたのを、切に乞うて肉食を避け精進して終に承諾を得た。これは一傳記者の記すところであるが、他の傳には、彼がその宿殃を癒す爲に、弘法大師に歸命して一百万禮を爲し、十年で了つたむねが記されてゐる。これらいづれも契沖が幼時出家

時勢變轉の犠牲

菅神

菅原道眞を祭神とする天満宮。



今里

今の大阪市東成  
區大今里町

妙法寺

初め眞言宗で、  
後、黄檗宗とな  
った。

曼陀羅院

大阪市天王寺區  
生玉にある。

室生山

奈良縣宇陀郡室  
生村にある。



の動機の自發的であつたのを語る。  
 第二に、出家後の修行に就いて見る。彼は十一歳いよゝゝ出家  
 して今里の妙法寺に入つたが、十三歳で高野山に上り、二十三四歳  
 で阿闍梨となり、その頃下山し  
 て曼陀羅院の住持となつた。  
 然もまもなく住職生活の煩ひ  
 に堪へかねた彼は、烈しい求道  
 心に驅られて放浪の旅に上つ  
 た。かくて長谷寺に詣でて絶  
 食念誦一七日、室生山に登つて  
 薰修精練三七日といふが如くに、近畿地方の山川靈異躋攀せざる  
 ものとてはなかつた。就中室生山に於ける修行については、室生  
 山南。有一窟窟。師愛其幽絶。以爲堪棄形骸。乃以首觸石。腦

久井・池田萬町  
共に大阪府泉北  
郡にある。

圓珠庵

大阪市東區にあ  
る。

水戸家

尾張家・紀伊家  
と共に徳川氏三  
家の一。

血塗地。無由命終。不得已而去。と記されて、當時彼の宗教的感情  
 の高潮に達した有様が想見される。かくて最後に再び高野山に  
 上つたが、こゝも彼をして永く止まらしめる地ではなかつた。彼  
 は間もなく下山した。その後は久井に五年、池田萬町に五年とい  
 ふやうに、泉州の静寂な山家に閑居の年月をおくつて修養した。  
 第三に、三十九歳頃から元祿十四年六十二歳で歿するまでの彼  
 に就いて見る。この二十三年間は、妙法寺住職と、圓珠庵隱棲時代  
 とに分れるが、この期に入ると共に、彼の人物は益々圓熟して徳化も  
 洽く、その完成の姿は、實に晩年の彼に於て見ることが出来る。  
 彼が歿後、門弟や召使の爲を思うて、檀家の人々に依囑するところ  
 であつた遺言状には、いかにも恭謙敬虔な心事と、清貧少しも貪る  
 ところのなかつた平生とが伺はれる。殊に水戸家から、心ならず  
 も毎年支給をうけた飯料の返納を頼み、生前諸人に負ふところ多



く、それを償ひ得なかつたことを遺憾とせるなど、いづれも彼の清僧的人格の片鱗を語らざるはない。

契沖が素質に、體驗に、修練に、宗教家的であり、而して同じくその人格を完成したことは、これ決して尋常なる僧侶でなかつた所以である。而して宗學の方面に於ても、彼はもとよりその間に研鑽すること深かつた。儀軌二百卷の筆寫を始め、註疏のたぐひが若干存してゐること、殊に悉曇の學に至つては覺彦に學んでその造詣が浅くなかつたこと、是等いづれもすでに闡明されたところである。

それにも拘らず契沖は、むしろ古典學者として認められ、また事實、その方面に偉大な業績を遺した。我が國の文化は、眞言僧としての彼よりも、日本古典學者もしくは國學者としての彼に負ふところが多い。僧侶として斯くの如きすぐれた彼が、偉大な國學者

儀軌

書名。佛教の經典中に説く佛・菩薩・諸天神に對する禮義のさだめを記したものの。

悉曇の學

シッタンのガク。梵語に關する學問。

覺彦

一名、淨嚴。江戸の眞言宗靈雲寺の住僧。元祿十五年歿。年六十四。(二二九九―二三六一)

であり得たのは何故であるか。もとよりこの二つの資格が、一個の人格に於て矛盾し背反すべき理由とてはない。しかし、いかにして、彼の場合、結合し又一致したかが、考ふべき點である。あまつさへ我が學問史上の實際からしては、古典の釋義に、古代精神の理解に、必ずその佛説や佛理の爲の附會曲解を事とするのが、佛徒の學者の場合に普通見たところであつたにも拘らず、契沖には殆どこれを見ないのみでなく、彼の學問には本質的にその曲解がなかつた。而して學問の一途に於ては、彼は徹底的にその教學から獨立して、あくまで眞理の追求者たる態度を、その古典學に維持し發揮した。

高野山に失望し、住職としての俗生活の煩ひに堪へなかつた彼が、その心の満足を求め得たところは、俗中の眞であつた。これ、彼が學問を生涯の事業とした所以である。彼の願ひ求めた眞とは、



言ふまでもなく眞如の世界である。彼の漫吟集中に、一大長篇無常賦がある。この一篇は、春の花咲きて散らずや、秋の月みちて缺けずやと、詠み起し、自然人事に互つて、世の常無きことを美しい措辭で述べて來て、最後に求道に歸すべきを歌つたものであるが、その終りの一節に、これを思へば朝顔のあしたのさかり、稻妻のよひのほのめき、かげろふのありてなければ、何をかは羨みはてん、夏草をとがまにふれて、かるほども心なとめそ、ひたぶるに法の御門のはじめなく終りも知らず、ゆほびかにすめる心の、都にぞ道をたづねて、とく到るべきといひ、反歌として、世の中のはかなきことを歎きてぞ常なる道も知るべかり

ける

と、あるのを讀み味はふと、彼がその眞を求めた切實な心境の鮮かに描き出されたのを覺える。而してこの同じ切實さが、所謂俗中の眞としての學問に對して示されたとせば、彼が學者としての純粹な態度と、透徹せる理智とは、これを理解するに決して難くないと思ふ。もしそれ、彼のその學問の種類を、和歌や古語に選んだ理由に至つては、かね／＼その方面に興味を有したとか、先輩長流を有したとか、或はまた悉曇學に素養を有したとか、種々考ふべきものがある。しかもそれらの事情も、畢竟前述の如き根柢のもとに理解されねばならない。之を要するに、契沖が學者として純粹であり得たのは、彼が眞の僧侶であつたからである。彼の清らかな聖心よりこそ、その澄みわたつた學問的意識は涌き出たのである。

（日本思想史研究）

長流  
下河邊長流



一〇 物まなび

本居宣長

於蘭陀  
當時徳川幕府は、外國との交通を禁止し、纔かに天主教に關係のないこの國のみに來交を許した。蘭學は當時に於ける唯一の洋學であつた。

ちかき年ごろ、於蘭陀といふ國のまなび  
などに、そのともがらかれこれとあめり。ある人もはらそのまなびをするがいひけるおもむきをきくに、於蘭陀は、その國人、物かへに遠き國々をあまねくわたりありく國なれば、その國の學問をすれば、遠き國々のやうをよくしる故に、漢學者のかの國にのみなづめるくせのあしきことの知らるゝなり。あめつちのあひだ、いづれの國も、おのゝ、その國なれば、必ず一むきにかたよりなづむべきにあらず。とやうに、おもむけいふめり。  
そはかのもろこしにのみなづめるよりはまさりて、一わたりさることとは聞ゆれども、なほ皇國の萬の國にすぐれて尊きことを

わろしとするか  
ら

ばしらざるにや。萬の國の事をしらば、皇國のすぐれたるほどはおのづからしるならむものを、なほ皇國を尊むことを知らざるは、かのなづめるをわろしとするから、たゞなづまぬをよしとして、又これになづめるにこそあらめ。於蘭陀にはあらぬよのつねの學者にも、今はこのたぐひもあるなり。  
二 物まなびはその道をえらびて入り

そむべき事

ものまなびに心ざしたらむには、まづ師をよくえらびて、その立てたるやう、教のさまをよくかむがへて、したがひそむべきわざなり。智チにぶき人はさらにもいはず、もとより智とき人といへども、大かたはじめにしたがひそめたるかたに、おのづから心はひかるるわざにて、その道のすぢわろけれど、わろきことをさとらず、又後にはさとりながらも、としごろのならひはさすがにすてがたきわ



ざるに、我とかいふ禍神さへ立ちそひて、とにかくにしひごとし  
 て、なほそのすぢをたすけむとするほどに、終によき事はえものせ  
 で、よのかぎりひがごとのみして、身ををふるたぐひなど世におほ  
 し。かゝるたぐひの人は、つとめて深くまなべば、まなぶまにまに  
 いよく、わろきことのみさかりになりて、おのれまどへるのみな  
 らず、世の人をさへにまどはすことぞかし。かへすくははじめよ  
 り師をよくえらぶべきわざになむ。

三 物まなびの心ばへ

むかしは皇國のまなびとて、ことにすることはなくて、たゞから  
 まなびをのみしけるほどに、世々をふるまゝに、いにしへの事はや  
 うやうにうとくのみなりゆき、から國の事はやうくにしたしく  
 なりもてきつゝ、つひにそのこゝろは、もはらからざまにうつりは  
 てて、上つ代の事は、物の意はさらにもいはず、言葉だに聞きしらぬ

異國のさへづりをきくがごと、ものうとくぞなりにける。

かくて後にいたりて、皇國の學をもはらとする事もはじまりつ  
 れども、しか漢意の久しくしみつきたる人心にしあれば、たゞ名の  
 みこそ皇國のまなびにはありけれ、いひとおもひとおもふこ  
 とは、猶みなからにぞありけるを、みづからもさは覚えざるなめり。  
 されば近き世、まなびの道ひらけて、よろづさかしくなりぬるに  
 つけても、なか／＼にそのからごころのみ深くさかりにはなりて、  
 古の意はいよく／＼はるかになむなりにけるを、このちかきころに  
 なりてぞ、そこに心つきぬる人の出で來そめて、世はみなからなる  
 ことをさとりて、人も我もいにしへのこゝろをたづぬる道の明り  
 こそめぬる。しかすがに、神直毘・大直毘の神のましましける世は、な  
 ほゆくさきいとたのもしくなむ。

四 田舎に古の雅言の残れる事

神直毘・大直毘  
 の神  
 共に不正なことを  
 改めなほす  
 神



すべてゐなかにはいにしへの言の、のこれること多し。殊にとほき國人のいふ言の中には、おもしろき言どもぞまじれる。おのれとしごろ心をつけて、遠き國人のとぶらひきたるには、必ずその國の詞をとひきゝもし、その人のいふ言をも心とめてきゝもするを、なほ國々の詞どもをあまねく聞きあつめなば、いかにおもしろきこと多からむ。

ちかきころ肥後の國人の來たるが、いふことをきけば、世に「見える」「聞える」などいふたぐひを「見ゆる」「聞ゆる」などぞいふなる。こは今の世には、たえて聞えぬ雅びたることばづかひなるを、その國にてはなべていふにや」と、とひければ「ひたぶるの賤山がつは皆、見ゆる、聞ゆる、さゆるなどやうにいふを、すこしことばをもつくろふほどの者は、多くは見える、聞えるとやうにいふなり」とぞ語りける。そはなかく、今の世のいやしきいひざまなるを、なべて國々の人

なんめり  
〔なるめり〕

のいふから、そをよきことと心得たるなんめり。いづれの國にても賤山がつのいふ言は、よこなまりながらも、おほく昔の言をいひつたへたるを、人しげくにぎはしき里などは、他國人も入りまじり、都の人なども、ことにふれて、きかよひなどするほどに、おのづからこゝかしこの詞を聞きならひては、おのれもことえりして、なまさかしき今やうにうつりやすく、昔ざまにとほく、中々にいやしくなむなりもてゆくめる。まことや同じ肥後の國の又の人のいへる、かの國にて、ひきがへるといふものを、たんがくといふなるは、古のたにぐくの訛なるべくおほゆ」と語りしは、まことに然なるべし。このたぐひのこと、國々になほ聞けることおほかるを、今はふと思ひ出でたることをいふなり。なほおもひいでなむまゝに又もいふべし。

五 雪螢を集めて書よみけるもろこじの故事

たにぐく  
葦の古名



孫康  
支那、晉の學者。

車胤  
支那、晉の學者。

玉かつま  
十五卷、隨筆、本  
居宣長の著。

もろこしの國に、むかし孫康といひける人は、いたく學問を好みけるに、家まづしくして、油をえかはざりければ、夜は雪の光にて書をよみ、又同じ國に車胤といひし人も、いたく書よむ事をこのみけるを、これも同じやうにいと貧しくて、油をえ得ざりければ、夏のころは螢を多く集めてなむよみける。この二つの故事は、いとく名高くして、しらぬ人なく、歌にさへなむ多くよむことなりける。今思ふに、これらもかの國人の例の名をむさぼりたるつくりごととにぞありける。その故は、もし油をえ得ずば、よるくはちかどなりなどの家にもものして、そのともし火の光をこひかりても、書はよむべし。たとひそのあかり心にまかせず、はつ／＼なりとも、雪螢にはこよなくまさりたるべし。又年のうちに雪螢のあるはしばしのほどなるに、それがなきほどは、夜は書よまでありけるにや。いとをかし。

(玉かつま)

一 すがのあら野

賀茂眞淵

信濃なるすがのあら野を飛ぶ鷺のつばさもたわに

吹く嵐かな

ゆふされば海上がたの沖つ風くもるにふきて千鳥

鳴くなり

楫取魚彦

水無月のなかの十日の中空にいともしこき日の

み面かも

天の原吹きすすみたるあきかぜにはしる雲あれば

たゆたふ雲あり

田安宗武

楫取魚彦  
歌人。下總の國  
(千葉縣)佐原の  
人。天明二年歿。  
年六十。(二三八  
三―二四二)







二二 防人日記

青柳種信

青柳種信  
通稱勝次郎。柳  
園と號す。國學  
者。本居太平の  
門人。福岡の人。  
天保六年歿。年  
七十。(二四二六  
一四九五)  
寛政の六とせ  
光格天皇の御  
代。(二四五四)  
宗像  
福岡縣宗像郡。  
瀛津島  
沖の島をいふ。  
宗像郡に屬す  
る。  
宗像の三柱云々  
官幣大社宗像神  
社の祭神。田島  
村にある邊津宮  
に多岐郡姫津大  
宮村にある中津  
宮に市杵島姫理  
姫を奉祀する。  
たはし  
満ち足りてある  
義。  
鳥飼の社  
縣社。鳥飼八幡  
宮。照神。天皇外  
宮。二神を祀る。福  
岡市鳥飼にあ  
る。

寛政の六とせといふとしの彌生の廿八日、宗像の郡の瀛津島に、  
防人にまかる。そのよしいさゝか物に書きつく。此の島は、國の  
北のわた中をそきて、新羅べに近き島にしあれば、つねに防人を差  
して、守らせ給ふ。此の島を領きます大神は、宗像の三柱の皇神の  
うち、一柱の大神におはします。神御稜威たゝはしくませば、旅だ  
つべきまへつかたより、ゆまはり清まはりて、家の内をも祓ひ、かり  
にもけがらはしきことなからまくす。けふは首途なればとて、鳥  
飼の社の神づかさを招きて、はらへのわざなど請ふ。午の時ばかり  
り、荒津崎の西の海邊より船乗す。古言に心よせある人々、追ひ來  
おのがもたる本なんど残してあたふ。せちに別れをしみ、さき  
く行きてさきく歸りこぬさとむけてのみつゝをらむ、たかく

荒津崎  
福岡港の西角の  
岬。今の福岡市  
西公園附近に當  
る。  
のむ  
祈る。

おきこの風  
沖の風。又息嘯  
の風ともいふ。

めづらしみ  
打昇の濱  
今福岡縣糟屋郡  
奈多濱のあた  
り。

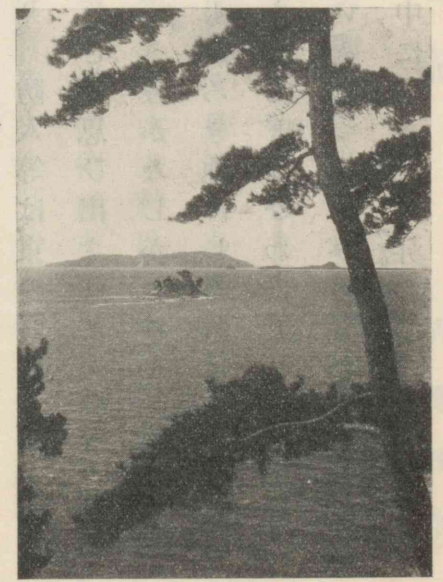
に待ちつゝ、あらむといふに、  
沖つ波ちへにたつともぬさまつり君しいのらばあにさは  
らめや  
わたのはら島のさきく霧たゝばきみがおきその風とし  
思はむ  
よみもはてぬに、船漕出でたり。防人等は、東の國より、はろくと  
溟渤をわたりて、仕へまつりしさま、思ひ出されてあはれにこそ。  
今かりそめの旅だに、別るといへばかなしかりけり。此の船出す  
る入海のさま、世にこえて、おもしろき地にしあれば、これの年ごろ、  
東にありて、又いつか見るべきなんどこひわたりしに、六とせばか  
りを経て、けふしも來つれば、いとめづらしみ、打見わたすに、入江の  
くまゝ、いづこもをかしき中につきて、打昇の濱のありさま、かし  
こき畫工の筆にも、書き寫すべからずや。青き海に、いと清らなる



梓領巾 梓布でつくつた  
領布 領布は、古、婦人の領から肩にかけて布帛をいふ。

島 福岡縣糟屋郡志賀島村陸續きであるが満潮の時、島になる。  
韓泊 今福岡縣糸島郡小田の地といふ。  
鷹島 今福岡縣糸島郡に屬する。  
可也山 福岡縣糸島郡可也村にある。形富士に似て筑紫大島沖の島の南方にある。

まさごの、梓領巾ひきはへたらんやうにて、今の道三里ばかり、つきける、あら、松原の、とほく打ちけぶりたるなんど、目もはるく、なり。とかくするうちに、西風吹きて、しら波立てば、あすこそとて、島においてやどりす。



志賀島を望む

廿九日。いまだ起きもやらぬに、船人追手よしといふ。島漕ぎ退きて顧みれば、きのふは霞こめておぼほしかりし韓泊も、けふはよく見ゆ。鷹島可也山もほど近く見ゆ。けふは、宗像郡の大島までと思ふ。浪高ければ、糟屋郡なる阿閉島にとまる。こゝにも島長立出でて、やどりに率てゆく。人々伴なひ、山にのぼりて、福岡のかたを見れども、そのともわかず。

わぎへ  
我が家。

たり

わたとつみも心あらなむ白浪の立ちさふべしやわぎへのあたり  
晦日。名兒山桂瀉見つゝ漕ぐ。日くだるまゝに、浪風高く、大島に著きぬ。鐘の岬を見わたして、見下る。かぜまもり大島の邊に我が居れば鐘のみさきにしら浪たつとも  
四月朔日。同じ所なり。瀛津島に渡る人々、此處より朝毎に海に入りてみそぎす。此の浦はいつしき皇神のしづまりますけにや、人ごとに物いはひして、けがらはしきことを、いたく忌みはかる。御嶽にのぼりて、をちこちを見めぐらす。はるか乾のかたに對馬見ゆ。瀛津島は、いづこそと見れど見えず。對馬の少し東の方に、嶺二つあるが、海の中よりものの角さし出だしたらむが如し。「おのが行くべき島は、あれにこそ」といふに、皆人肝消えたり。いかで



一たびは御島にまゐりてしがなと、心にねぎしかど、今かくものすべしとは思ひかけざりしを、いとたふとくて、遙かにをろがみまつりて、  
 いかも見むとおもひしむなかたの沖つ御島を見るが  
 六日。猶同じところなり。瀛津島の神づかさ河野ぬしがもとよ  
 三日。猶同じところなり。瀛津島の神づかさ河野ぬしがもとよ  
 り、來べきよしいひおこせり。打連れてゆく。醉ひしれて日の暮  
 るゝをも知らず遊ぶ。  
 四日。風波やむべくもあらず。いつか瀛津島には、渡りぬべきと  
 のみいひあへり。浪の立つを見て詠める歌、  
 梓弓はるはくれしをわたつみのかざしの花はいとゞ咲き  
 五日。浪風静かなれば、船出せよといふ。舵取、遙かなる船路にし

あれば、追手のおりずば、いかで漕ぎあへむ」といふに、人々いたづら  
 に海原を眺めつゝぞある。はかしくも語らふべき人もな  
 ければ、いと侘し。いとよく晴れわたりて、瀛津島見ゆ。  
 六日。けふも船出せず。  
 七日。おなじところなり。濱に下り立ちて網引するを見る。  
 八日。追手なれど、浪高しとて、船出せず。  
 九日。風も叶ひぬれば、いざ船出せむとて漕ぎ出づ。ひだりみぎ  
 り見めぐらせど、向伏す雲のみなり。あへて漕ぎ出でし七つの船  
 は、木の葉の浮きたらむよりもちひさし。浪の立つにはあらねど、  
 大海のゆらふに人々心あしみて、かしらを船簀にあてて、物をも  
 えいはず。船子どもは、神の御心にかなひ給へる人々にこそあら  
 め。年ごとに行きかへども、かゝるしづけき海をわたりし折なむ  
 なき」とぞいふ。近づくまに、仰ぎみれば、其のさまいとあやし



忌みこもらす。

せみ

鯨の一種。鯨中の最も大きいもの。

石花

節足動物の一。海中の石に附着して生息する。かめのてともいふ。

未の時

午後二時

申の時

午後四時

くて、他國に漂ひ著きたる心地す。磯におりゐて海の平けかりしを、互に悦びあへり。神司は、懸崖の下なる磯にいほりして、忌みこもらす。七月四日。壹岐のかたの海に、白浪の山のごとく高く見ゆる、怪しみ見るほどに、黒く大きな魚の浪をかづきて、浮き沈みつゝ行くなり。かの物知れる海人、せみといふ鯨なりといふ。五日。西の方より、大きな竹浪のまに、流れ来る。船漕ぎ出でて取り上げみれば、韓竹なり。長さ六尋ばかりなり。網の泛子やうのものなりしとみえて、根かたに穴を彫りたり。ところどころ、石花、蠣などつきて、をかしき物なりしかば、人々花瓶などに切りて翫ぶ。二十二日。未の時ばかり、船遙かにうかみ來。申の時ばかりに島

呼子浦  
佐賀縣東松浦郡にある。

なごろ  
餘波。

に著きぬ。日頃待ちわびたりし防人のかはりの船なり。今ひとつの船、わづか一里ばかりもや隔つらむと見しほどに、空俄かにかきくもりぬ。北風烈しく吹きしきり、濤たちさわぎて、大海おどろおどろとあらぶ。とかくするうちに、日も暮れぬ。いと暗きに、いかゞはせむとて、さきに著きたりし船子ども、あわてて磯に火を擧げ、爰よ〜と叫ぶ。さらに船ありともおぼえず。浪のそこにや打ちいれけむ、又は風に放されて、遠き島呼子浦などにや流れ行きけむ。夜更くるにつけて、浪の音は千萬の雷の鳴りはた〜くらむやうなれば、よも此の島に向ひて舵を立ててはえあるまじ。助けに行くべきやうもなければ、人々ひたぶるに神にねぎ乞ふ。子の時ばかり空少し晴れて月さし出で、なごろもすこしく洋ぎたりとおぼゆる頃、いと悲しき聲しておらびさけぶ。すはや船の寄りぬとて、手に〜手火をさゝげて、磯に出で、船はからくして漕ぎよせ



防人日記

二卷、青柳種信の防人として瀧津島に渡つた時の日記。

たれども、磯浪高くしてほと／＼打返されぬべく見えしかば、陸なる船子ども、磯ぶりのよする中に飛入り飛入り、岸に助けあげぬ。人々いかに苦しかりけむ。物もいへど、船子ら、いらへもせで泣きみたり。まして船人ならぬは、生ける心もなく、打臥しむたりしが、人々に助けられて、水船のうちより衣はしとゝにぬれてはひ出づ。されど船の内の人、ひとりもあやまちなく、さきかりしことを、著くも待つも悦びあへり。

今奉部與會布

今日よりはかへりみなくて大君の醜しとの御盾と出で立つ

我は

(萬葉集)

貝原益軒

名は篤信、儒者。筑前の國(福岡縣)の人。正徳四年歿。年八十五。(二二九〇—二二九七)

一三 用財論

貝原益軒

萬の事皆法あり。法にしたがへば、其の道立ちて其の事成る。法を守らずして、只我が心にまかせ行へば、必ず其の事やぶる。家ををさむるに尤もつとも法あるべし。法なければ必ず財用盡き、困窮して家を保ちがたし。

凡およそ、家を治むるに、財を用ふる法を知りて、堅くつゝしみ守るを要とす。之を知りて守ると、知らずして守らざるとは、家の盛衰存亡の本にて、其のかゝる所いと重きことなれば、つねに心を用ひ、よく其の法を知りて守るべし。おろそかなるべからず。其の法を知らず、おろそかにして、心を用ひざれば、必ず困窮にいたりて家をやぶる。今の人、家の主となりて、多くは家をたもつ道をおろそか



貧窮なれば云々  
管子に「倉粟實  
則知禮節、衣食  
足則知榮辱」とある。

おぎのる  
強ひて掛買する  
をいふ。

にして、財を用ふる法を知らず。故に貧窮にいたる。貧窮なれば、みづから苦しむのみならず、親を養ふことうすく、君に仕ふるにつとめがたく、人に施しめぐまず、禮儀を行ひがたし。人に乞ひ借り買ひおぎのりて、おひめをつぐのひがたし。百行かけて行はれず。武士は武備なくして、戦陣をつとめがたし。不意なる變にあへば、困苦して如何ともすべからず。貧苦のわざはひ、子孫にいたりてやまず。或は一代にて家をやぶる。悲しむべし。諸の細事雜藝をば、さほど知らずともありなん。まづ家を保つ道を早く知りて守るべし。是、人生至要のことなり。おろそかなるべからず。

家を治むる主人は、日夜家事をよく勤めて怠らず、おろそかならず、財を用ふるに奢らず費さず、もはら儉約を行ふべし。勤と儉との二つは、家ををさむる要道なり。此の二つの道行はるれば貧窮

に至らず、我が用に乏しからず。勤と儉と二つの道を行ふに、心を小にしておろそかならざるをよしとす。是、勤儉を行ふ心法なり。

勤儉なれば必ず貧窮にいたらず、我が財祿にて家をたもち、財を人にもとめ借らずして足りぬ。人の貧窮をすくひ、音信、贈答、饗應の禮儀をととのへ、其の上餘蓄ありて不意の禍にあへる時の變に備へ、武具を調へ武事に備へあるは、是よく財を用ふるなり。

家を保つのは、勤と儉との二つにあり。四民共に勤むれば、家業よくをさまり、財祿を得るの基となり、又家業よくととのほり家をさまる。勤むるは是財祿を得るの本なり。本はつとむべし。儉約なれば、財を失はずしてよく家をたもつ。儉約は、財をたもちて失はざる道なり。二つの者ならび行はれて家道立つ。一も缺



くべからず。四民皆同じく是を行ふべし。又勤と儉との工夫は忍にあり。忍はこらふるなり。苦勞をこらへてよくつとめ、私欲をこらへて儉約を行ふべし。

家ををさめ、財を用ふるに、事ごとに心を用ひて精しくし、こまやかにして疎略なるべからず。おごらずやぶさかならず、過不及なくよき程にすべし。用ひ過すはおごれり、不及なるはやぶさかなり。心あしくして、大やうにおろそかなれば、財の用ひやう過不及にして、或はおごり或はやぶさかなり。與ふべきものを與へず、與ふまじきものに與へ、多く與ふべき者にすくなくし、すくなかるべきに多くするは、事そむきて理にあたらず。是、心を用ひず、用ひても精しからざるなり。

財祿をたもつてうしなはざること、徳なければ成りがたし。幸ありて得れども、徳なくして失ふ人おほし。故に財祿ある人は、徳行をつゝしんで其の財祿をたもつべし。又財祿をむさぼり、分外の富を求めて子孫にのこさんとするより、家法を正しくし、子孫に道のをしへをのこすにはしかじ。子孫無道なれば、財祿をのこせども必ず失ふ。四民皆かくの如し。我が財祿をたもちて失はず、子孫長久ならしめんことをねがはば、唯仁心を以て人をあはれみめぐみ、善を行ふをつねの樂とし、子孫に善ををしへ勸むべし。是天道にかなふ理なれば、當時目に見えたるさいはひなくとも、後に必ず天のめぐみをうくべし。

(益軒十訓)

益軒十訓  
益軒の教訓書中の  
主なるもの十  
種を集めて一冊  
としたもの。



### 一四 滑稽文學の雙壁

編者

江戸の地勢は、山の手と下町とに分れる。山の手は、旗本や勤番の武士の巢窟であつて、彼等は漸く都會風の生活に馴れたとはいへ、なほ大體の氣象は、質實であつて、自尊心に富み、道義に生きて、世情に通達しない風があつた。これに反して、下町は、商工の徒が大部分を占めて、氣象は闊達に、義侠心に富んでゐたが、道理に疎く、鼻つぱりは強くして向う見ずな感があつた。今この二方面を代表すべき作品を、近世後期に求めると、馬琴は前者を代表して、律義にして野暮くさく、一九三馬は後者であつて、軽いけれども深からず、只管諛譎滑稽を旨とする所がある。

十返舎一九は、武家の子であるが、文章の心得があつたので、草雙子を作つて稍、世に行はれ、享和二年に中本の傑作、東海道中膝栗毛

#### 草雙子

江戸時代に行はれた繪本を主とした短篇小説。赤本・黒本・青本・黄表紙・合巻物等の種類がある。

#### 中本

江戸時代の社會状態の描寫を主とした小説。

を出して大いに世に行はれ、年毎に一編を著して、文化六年に至るまでに初編八編を大成した。しかも世上にはなほ續編を求めて止まないで、續いて金比羅道中、宮島參詣、木曾街道、善光寺詣、草津温泉の諸膝栗毛を著した。しかしこれらは輕妙なる滑稽に於て、到底東海道中に及ばない。

東海道中膝栗毛は、彌次郎兵衛、北八といふ者、江戸を出發して伊勢の神宮に參拜し、大阪に至るまでの道中記で、途中の宿々で滑稽を演ずることを記してゐる。

**日本橋より品川へ二里** 富貴自在冥加あれとや、營みたてし門の松風、琴に通ふ春の日のうらゝかさ、大道は髪のごとくしと、毛すぢ程もゆるがぬ御代のためしには、鳥が鳴く吾妻錦繪に鎧武者の美名を残し、弓も木太刀も額にして、千早振る神の廣前にをさまれる豊津國のいさをしは、堯舜のいに

#### 品川

東海道五十三驛の第一驛。今東京市品川区。

富貴自在云々、琴限の文句、大道は云々

唐詩選、儲光羲の詩に、「大道直如髮、春日佳氣多。五陵貴公子、雙々鳴玉珂。」とあるによる。鳥が鳴く、あづまにかゝる枕詞。



聖代  
こゝでは青黛に  
言ひかけた懸  
詞。

高輪  
東京市芝區高  
輪

前句集  
古今前句集

しへ延喜のむかしも、目のあたり見る心地になん。  
「いざや此の時、國々の名山勝地をも巡見して、月代にぬる聖代の御徳を、藥罐あたまの茶呑ばなしに貯へんものをと、玉くしげ二人の友どち誘ひつれて、山鳥の尾の長旅に立出づる。かくて早くも高輪の町へ來かゝり、川柳點の前句集を思ひ出せば、  
高輪へ來て忘れたることばかり

と詠みたれど、我々は、何ひとつ心がかりの事もなく、愉快な旅を續ける。かくて土地土地の方言を交へた會話を中心として、主人公兩名を上方へと運んでゆく。作者は後に發端を作り加へて、彌次郎兵衛北八の身元を説明してゐるけれども、それは畢竟蛇足で、作中に現はれた主人公は、江戸子の氣象その儘で、善良ではあるが思慮淺く、口舌の機智に富みて快活な性質を有してゐる。その滑稽は、多くは主人公の失敗により演ぜられるもので、野卑な材料が多

黄表紙

草雙子の一種。  
表紙は黄色で、  
毎葉繪がある。  
一卷五葉づつ、  
全部三巻で終つ  
てゐる。

洒落本

江戸時代の小説  
の一。主として  
當時の世態・人  
情を描く。製本  
は半紙二つ折  
り。  
瀧亭鯉丈  
通稱八右衛門。  
小説家。天保十  
二年(一五〇一)  
歿。

いのは遺憾であるが、彼等は度々の失敗にも懲りず、飽くまで樂天的な本質を失はない。彼等は處々に狂歌を詠んで旅の興を添へてゐる。その狂歌は、もとより駄洒落が大部分であるが、當時の讀者に取つては、相當に興味を誘ふものがあつたのである。

式亭三馬は、木版彫刻師の子として養育せられ、早くから黄表紙、洒落本の著があり、文化三年に中本の傑作浮世風呂の初編、文化八年に浮世床の初編を出し、同九年に浮世風呂は四編を出して完結し、浮世床は二編を出して未完の儘に終つてゐたのを、文政六年に至つて瀧亭鯉丈が代つて三編を續成した。

浮世風呂は、當時の錢湯を舞臺として、こゝに展開する世情を描き、浮世床は同じく髮結床に集散する人物を寫す。いづれも會話を中心として筆を運んでゐるが、發端は、やはり美文めかして書いてゐる。浮世風呂の冒頭は、



五日の風云々

王充論衡に「太平之世、五日一風、十日一雨」とある。

早仕舞

烈風の際は申の刻(午後四時)を限つて早仕舞とする。

煤湯

十二月十三日煤掃の日。

五塵

佛敎にいふ心の障礙となる五つの穢・色・聲・香・味・觸の機能の眞性を穢すをいふ。

貰湯

正月・七月の十六日は、湯銭は三助の所得となるので貰湯といふ。

六欲

佛語、眼・耳・鼻・舌・心・意に生ずる欲情。

五日の風静かなれば、早仕舞の牌たを出さず、十日の雨穩かなれば、傘の樽をも出さず、月竝の休日静謐にして、賢きも愚かなるも、貴賤おのゝ恩澤に浴する人心、今日煤湯を浴びて五塵の垢を落し、明日貰湯に入りて六欲の皮を磨りむき、いつも初湯の心地せらるゝは、げにも朝湯の入加減、嗚呼結構とやいはむ、噫嘻ありがたいかな。

と起してゐる。浮世床、またこれに準じて、大道直うして髪結床必ず十字街にあるが中にも、浮世風呂に隣れる家は、浮世床と名を呼びて、云々と説明してゐる。

三馬の滑稽本は、もと一九の膝栗毛が當つたのに刺戟せられて、稿を起したものと考へられるが、膝栗毛は、彌次郎兵衛北八の兩人を中心として話を運んで行くに反し、浮世風呂浮世床にはかやうな中心人物は居ない。たゞ湯屋や床屋に集つて來る市井の男女

を、順次登場せしめ來るに過ぎない。膝栗毛が主人公の演ずる失敗を中心とした滑稽な筋を物語るに對して、浮世風呂浮世床には、筋と稱すべきものは無く、登場し來る人物の描寫に依つて、世態を展開せしめてゐる。殊に後者が、會話によつて、その人々の種類を躍如たらしめる手腕は、非凡といふべきである。

膝栗毛の歓迎せられたのは、一面にはその道中記としての性質が、當時の勤番者に取つて興味を呼んだ點にもあり、奥底の無い快活な主人公の性質が、時代人の好みに投じた點にもある。編中にも狂歌を挿んでゐるやうに、これを狂歌的趣味とすれば、一方に、人間を描いて、しばゝその高慢、衒學、無智、我儘等の姿を寫し出してゐる浮世風呂、浮世床は、正に川柳的觀察點に立つものと云ふを得るであらう。



### 一五 現代の文學

編者

明治天皇、英邁の天資を以て、王政維新の大業を完成し給ひしよりこの方、國歩は駿々として日に進み、世界の列強に伍して、新日本の基礎はこゝに確立した。かくて文教は全國に布かれ、文字は山間僻地にも行互つて、印刷術の進歩とともに、從來の都會中心であつた文學は、正しく一大轉機を成して、作者はなほ主として東京に集中されたとは云へ、讀者層は漸を逐うて全國的に廣まるに至つた。

明治時代に於ける文學は、初めは情力によつて舊來の様式を守り、古河黙阿彌の脚本の如き、むしろ舊様式の完成と見るべきものであつた。しかも歐米との交通の頻繁になるに伴ひ、その文化は澎湃として流入し、文學もこれが爲にいちじるしい刺戟を受け

古河黙阿彌  
通稱吉村新七。  
初め二世河竹新七と云ひ、後黙阿彌と改めた。  
劇作家。明治二十六年歿。年七十八。

て、轉向を示すに至り、文章もいはゆる口語體の文を生じ、小説に詩歌に、全く前代の面目を一新した。

明治時代に至つて、特に發達したものは小説である。その傾向は多端であつて、且變轉して極り無き狀を呈してゐる。當初に出た尾崎紅葉、幸田露伴の作品は、遙かに元祿時代の西鶴の影響を受けて、文章を以て鳴り、二葉亭四迷はロシヤ文學を翻譯すること多く、創作も亦その風を追うて描寫に新味がある。露伴はむしろ理想主義といふべく、紅葉、四迷は、寫實主義と稱すべきに近い。この間にあつて、樋口一葉はよく人生の辛酸を描いて、女流作家として氣を吐いてゐる。

明治後期に出て、新寫實主義を唱へ、人生を忠實に描いた作家に小杉天外がある。彼は主としてフランスの自然主義作家ゾラの傾向を斟酌したものであるが、永井荷風も亦此の傾向に進み幾多

小杉天外  
名は爲藏。小説家。慶應元年生。フランスの小説家。(一八四〇—一九〇二)

幸の再婚  
のつて  
里山在縁有  
二葉亭四迷  
吉村新七  
河竹新七  
木村強外  
舞姫(如世作)  
紅葉  
多情多  
無想術  
小説

一五 現代の文學  
田代百合子  
鹿



田山花袋 小説家、群馬縣の人、昭和五年歿、年六十。  
 徳田秋聲 小説家、金澤市の人、明治四年生。  
 正宗白鳥 小説家、岡山縣の人、明治十二年生。  
 フローベル 小説家、(一八二一—一八八〇) フランスの小説家。(一八五〇—一八九三) モーパッサン

の作品を發表した。この頃、現實生活を深く諦視して、それを忌憚なく描出せんとする文學運動が擡頭した。自然主義が即ち是である。その作家に國木田獨步、島崎藤村、田山花袋、徳田秋聲、正宗白鳥等を擧げることが出来る。獨步は英文學の影響多く、その作品は簡潔な筆致で力強く主題を展開させてゐる。花袋、藤村等の作品は、佛國のフローベル、モーパッサン等の作風の影響を受けてゐる。彼等の描いた人生は、貴族的な絢爛な生活ではなく、平凡人の平凡なる生活に於ける人間本能の苦惱や利己的闘争であつて、人生の實際の如何なるものであるかを切實に感ぜしめる。此の間にあつて、森鷗外は、外國文學の翻譯紹介、評論に多く力を用ひると共に、科學的心理的描寫による幾多の名作を發表した。鷗外と殆ど時を同じうして出た夏目漱石は、東洋的趣味を基調とし、英文學に於て養ひたる蘊蓄を傾けて、自己独自の藝術の世界を開拓して

武者小路實篤 小説家、東京府の人、明治十八年生。  
 志賀直哉 小説家、宮城縣の人、明治十六年生。

行つた。明治はやがて大正と改元されるに及び、文壇は再び新進氣鋭の士によつて、百花繚亂の有様を呈するに至つた。自然主義は次第に衰退し、その反動として人道主義又は新理想主義と稱する文學が擡頭してこれに代つた。人道主義の一派と見做すべき白樺派の人々の中に、武者小路實篤、志賀直哉等がある。彼等の態度は、どこまでも積極的であり、人生を肯定し、人類の將來に希望を認めてゐるのである。こゝに新理想主義と呼ばれる理由があつた。かくて、暗黒懷疑の世界に彷徨してゐた文壇の空氣に、一點の光明を點じた。實篤は、簡明にして直截なる筆致を以て、その思想を小説に、戯曲に、隨筆に、忌憚なく披瀝し、直哉は、鋭い觀察と直感とにより、明澄なる文章を以て微妙な人間の心理を描寫した。かやうに文學の新轉向を來したのは、滔々として我が國に流れ



ドストエフスキ  
ロシアの小説家 (一八二一—一八八二)  
タゴール  
印度の詩人・哲學者 (一八六一—一八八二)  
ロマン・ロラン  
フランスの小説家 (一八六六—一八九二)  
カーペンター  
イギリスの思想家・社會改造家 (一八四四—一九二九)  
ラッセル  
イギリスの思想家 (一八七二—一九二〇)  
オイケン  
ドイツの哲學者 (一八四六—一九二六)  
ベルグソン  
フランスの哲學者 (一八五九—一九四一)  
ポ  
米國の詩人・小説家 (一八四九—一九〇九)

入つた海外思潮の甚大なる感化に依るのである。露のトルストイ、ドストエフスキ、印度のタゴール、佛のロマン・ロラン、英のカーペンター、ラッセル、獨のオイケン、佛のベルグソン等の思想は、廣く我が國に紹介された。是等新思想の移入は、遂に自然主義の停滞萎微を招來するに至つた。

かゝる文學思潮推移の間にあつて、頽廢味と神祕の匂ひとを備へた作品に、異常なる感覺を盛つて、浪漫的色彩を明示した作家に谷崎潤一郎がある。彼には米のポ、佛のポドレールの影響が認められ、耽美派又は惡魔派の名稱を以て呼ばれてゐる。

かの人道主義と相竝んで、新に崛起したのは、現實主義を奉ずる純藝術派の作家である。現實主義は、觀察に於て科學的精密を尊ぶと共に、嚴肅な主觀を基礎とする批判を以て人生に臨む態度を有するものである。歴史的資料を、冷靜な觀察、新しい様式の下に

ポドレール  
フランスの詩人 (一八二一—一八六七)

取扱ひ、現代的に生かした菊池寛、芥川龍之介等の作品は、即ち此の現實主義の中に包含されるものである。今日の諸作家の多數は、概して此の現實主義によるものと認められ、現在では幾多の新進作家により個性化し、局部化し、多種多様の展開を示すに至つた。

世界大戰終局後、經濟組織の研究から發して、社會意識、階級意識の自覺となり、その思想の表現を藝術に求めようとするものの中に、所謂無産階級の文學なる名稱を以て呼ばれる一派が生じたが、未だ完成の域にまで進んでゐない。

以上は、その主要なる位置を占める作家であるが、その他諸家相踵いで出で、千紫萬紅の狀を呈し、且その主張は雜多であり、一言にして盡し難いものがあるが、大體題材を現代に取るもの多く、人生を有るがまゝに描かんとすることが中心を成してゐる。而して現實の姿を描寫する爲には、作家自身を主人公とし、自家の體驗を



敘述しながら、しかもこれを三人稱で現してゐる作品に富んでゐる。

新體詩は、やはり歐米の詩に刺戟されて起り、初めは今様を連続したやうなものであつたが、島崎藤村・土井晩翠・薄田泣菫・蒲原有明等の名手が出て、文藝としての位置を高め、更に口語體を以て詩を作るに至つて、一段の展開を見た。

小説と新體詩とは、明治年間以後に於て最も發達した文學であるが、その他、和歌・俳句・脚本の方面も、それ／＼に新生命を開いた。和歌は、當初にあつては、國學者系統の歌人と、桂園の門流とに依つて傳統を保つて來たが、落合直文・佐佐木信綱に至つて自由の態度を加へ、直文門下の與謝野寛は、後に新詩社を創設し、一層自由奔放の新境地を開き、その社中から與謝野晶子・北原白秋を出し、信綱の率ゐる竹柏會は、歌風の清新を標榜し、個性を尊重したので、個性

今様

今様歌の略

蒲原有明

名は隼雄。詩人。

東京府の人。明治九年生。

桂園の門流

香川景樹の歌風

を継ぐ一派。

與謝野寛

歌人。京都府の人。

昭和十年歿。

年六十三。

的特色ある歌人を出した。別に、正岡子規は萬葉を宗として一派を立て、和歌革新の聲を揚げた。子規は初め俳句に依つて立つた者であつて、この方面では、蕪村等の天明調を高唱し、從來の月竝風の俳句を更正した。その門流に、和歌に伊藤左千夫・島木赤彦・齋藤茂吉、俳句に高濱虚子・河東碧梧桐あり、それ／＼一家を成した。碧梧桐は、特に師風より脱して新傾向を唱導し、その句風は轉々として止まる所を知らない。後この一派の人々によつて、季題を棄て句調を自由にする運動が起された。

演劇は、舊來の傳統を守る歌舞伎劇の外に、現代を取材の方面とする新派劇が起つて、多く通俗小説を脚本化して舞臺に上せた。而してこれに慊らざる新劇運動は相繼いで起り、翻譯劇を主として上演し、相當の効果を擧げてゐる。即ち明治後期に於て、坪内逍遙は文藝協會、小山内薫は自由劇場を起し、これに前後して幾多の

小山内薫

劇作家。廣島縣

の人。昭和三年

歿。年四十八。



新劇運動が勃興した。更に鷗外の西洋近代劇の翻譯、紹介等に刺戟され、戯曲の創作に筆を著ける作家が續出した。この趨勢は、今日も猶依然として續いてゐるが、未だ小説に於ける程の目覺ましい進展を見ない。今後、我が演劇をして、更に新生面を開かしむべき優秀なる脚本の出現は、期して將來に俟つべきであらう。大正期以後は映畫が發達して、これが爲に脚本を草する者も多いが、いまだ後世に傳ふるに足るべき名篇を見出さない。

要するに明治期から大正期にかけての文藝運動は、歐洲の文學に刺戟せられた翻譯的作品に始まり、漸次内に省みて、歴史的に生育し來つた要素が、形を變へて光輝を發する傾向に進んでゐる。思想は幾多の潮流を成して横溢してゐるが、これらを一貫すべき主脈は、歴史と共に培はれ來つた根強い國民精神であるべきであつて、これ、やがて今後の文藝運動の中心とならなければならぬ。

ものである。

元來、文學の作品の成立は、當時の社會の諸機能と不可分の關係にある。奈良時代文化の盛期に於ける萬葉集の歌謠、元祿文化の爛熟期に於ける近松の淨瑠璃、芭蕉の俳諧、又獨逸に於けるシュトルム・ウント・ドラングの後に、ゲーテ・シルレルの如き詩人が燦然と光輝を放つた如き、何れも偉大なる文學作品を生じた社會的現象の相似を發見するに難くはない。

現代は未だ整頓せられない時代であり、不均齊の時代でもある。そして印刷術の隆昌、交通の發達を始めとして、現代生活の機能は、機械の發達に伴なつて其の速度を加へつゝある。又幾千年來我が日本文學が有してゐた自然に對する敏感は、まづ都會に於て次第に失はれ、四季の變化に對する感覺の如きは、漸次人工的生産物に對する鋭敏な感覺へと推移して來た。

シュトルム・ウント・ドラング  
十八世紀の末ドイツに於て激越な一種の革命的反抗的氣分が一般精神界、特に文學の方面に横溢して、ドイツ文學史上に自ら一時期を劃し、また一派をなしたものをいふ。  
シルレル  
ドイツの大詩人。(一七五九—一八〇五)



然るに、人間は雑多より統一へ、不均齊より調和へと能動的に働く本能を有してゐる。即ち來るべき時代は、大なる調和統一の時代でなければならぬ。政治・宗教・經濟等、あらゆる社會文化の構成要素が、渾然と統一綜合さるべき時代でなければならぬ。此の時にこそ、文學に於ても我等の期待する日本文學が誕生するのである。そして、宇宙の萬象を包攝し得る偉大なる日本精神の所有者にして、始めて世界に誇るべき日本文學を産み出すことが出来るのである。太古以來培ひ來つた歴史を根柢とし、更に廣く世界の文化を攝取して發達した我が國の文化が、遂に世界の光明となるべきことは、斯の道に於ても眞實でなければならぬ。

一六五 重塔

幸田露伴

のつそり十兵衛  
親方源太郎と張  
合つて五重塔を  
建てた大工、そ  
の擧動の運鈍な  
ところからのつ  
そりと緯名せら  
れた。  
感應寺  
假設の寺名。  
金剛力士  
佛法守護の二つ  
の神。二王尊の  
こと。  
坤軸  
地軸の意。  
爲右衛門  
感應寺の用人の  
名。  
圓道  
感應寺の役僧の  
名。  
我等が頼む師  
感應寺の住職、圓  
上人を指す。

時は一月の末つ方のつそり十兵衛が辛苦經營空しからで、感應寺生雲塔しやううんたいよ／＼物の見事に出來上り、段々足場を取除けば、次第次第に露るゝ一階一階又一階、五重巍然と聳えたるさま、金剛力士が魔軍を睥睨たにんで十六丈の姿を現じ、坤軸搖がす足ぶみして巖に突立ちたるごとく、あつばれ立派に建つたるかな、あら快き細工振りかな、希有ぢや、未曾有ぢや、再びあるまじ。と、爲右衛門より門弟までも、初手のつそりを輕しめたることは忘れて讚歎すれば、圓道はじめ一山の學徒も躍りあがつて歡び、これでこそ感應寺の五重塔なれ。あら嬉しや、我等が頼む師は、當世に肩を比すべき人も無く、八宗九宗の碩徳たち、虎豹鶴鷺と勝れたまへる中にも、絶類拔群たつらんにて、譬へば獅子王孔雀王。我等が頼む此の寺の塔も、絶類拔群にて、



八宗九宗  
華嚴・律・法相・  
三論・成實・俱  
舍・天台・眞言を  
八宗と云ひ、こ  
れに禪宗を加へ  
て九宗といふ。

達賦伽尊者  
古、印度に於け  
る建築の名师で  
あつたといふ。

奈良や京都はいさ知らず、上野、浅草、芝山内、江戸にてこれにまさるものなし。殊更塵土に埋れて、光も放たず終るべかりし男を拾ひあげられて、心のたまの輝を世に出だされし師の美德、困苦に撓まず、知己に酬いて、遂に仕遂げし十兵衛が頼もしさ、おもしろくまた美しき奇因縁なり、妙因縁なり。天の成ししか、人の成ししか、將又諸善神の陰にて操り給ひしか、屋を造るに巧妙なりし達賦伽尊者の噂はあれど、世尊在世の御時にも、かく快き事ありしを未だ聞かねば、漢土にも聞かず。いで落成の式あらば、我偈を作らん、文を作らん。我歌をよみ、詩をなして、頌せん、讚ぜん、詠ぜん、記せん。と、各互に語り合ひしは、慾のみならぬ人の情のやさしくも、また殊勝なるに引替へて、測り難きは天の意。圓道爲右衛門二人が計らひとして、いと盛んなる落成式執行の日も略、定まり、其の日は貴賤男女の見物を許し、貧者に剩れる金を施し、十兵衛其の他を犒ひ賞する一

方には、また伎樂を奏して世に珍らしき塔供養あるべき筈に、支度とり、なりし最中、夜半の鐘の音の曇つて、平日には似つかず耳にきたなく聞えしが、次第に怪しき風吹出して、ねむれる子供も我知らず夜具踏脱ぐほど、時候生暖くなるにつれ、雨戸のがたつく響烈しくなりまさり、闇に揉まる、松柏の梢に天魔のさけびものすごくも、人の心の平和を奪へ、平和を奪へ。浮世の榮華に誇れる奴等の膽を破れや、睡を攪せや。愚物の胸に血の濤打たせよ、偽物の面の紅き色奪れ。斧持てる者斧を揮へ、矛持てる者矛を揮へ。汝等が鋭き劍は饑ゑたり、汝等劍に食をあたへよ。人の膏血はよき食なり、汝等劍に飽くまで喰はせよ、飽くまで人の膏血を餌へ。と、號令きびしく發するや否や、猛風一陣どつと起つて、斧をもつ夜又、矛もてる夜又、饑ゑたる劍をもてる夜又、皆一齊に暴れ出しぬ。長夜の夢を覺されて、江戸四里四方の老若男女、惡風來れりと驚



き騒ぎ、雨戸の横柄子しつかと挿せ、心張棒を強く張れ」と、家々毎に  
 狼狽ふるを、あはれとも見ぬ飛天夜叉王、怒號の聲音ただけしく、  
 「汝等人を憚るな、汝等人間に憚られよ。人間は我等を輕んじたり、  
 久しく我等を賤しみたり。我等に捧ぐべき筈の定め、の性を忘れ  
 たり。這ふ代りとして立つて行く狗、驕奢の塹巢作れる禽、尻尾な  
 き猿、物言ふ蛇、つゆまことなき狐の子、汚穢を知らざる豕の女、彼等  
 に長く侮られて、遂に何時まで忍び得ん。我等を長く侮らせて、彼  
 等を何時まで誇らすべき。忍ぶべきだけ忍びたり、誇らすべきだ  
 け誇らせたり。我等を縛せる機運の鐵鎖、我等を囚へし慈悲の岩  
 窟は、我が神力にてちぎり棄てたり、崩れさせたり。汝等暴れよ、今  
 こそ暴れよ。何十年の恨の毒氣を彼等に返せ、一時に返せ。彼等  
 が驕慢の氣の臭さを、鐵圍山外に攫んで捨てよ。彼等の頭を地に  
 つかしめよ。無慈悲の斧の刃味の好さをば、彼等が胸に試みよ。

鐵圍山

テツチセン。委  
 しくは鐵圍輪山  
 といふ。佛説に  
 いふ須彌山を中  
 心としてその外  
 廓を成すといふ  
 假設の山。

残酷の矛、嗔恚の劍の刀糞と彼等をなしくれよ。彼等が喉に氷を  
 與へて、苦寒に怖れ顛かしめよ。彼等が膽に針を與へて、祕密の痛  
 みに堪へざらしめよ。彼等が眼前に彼等が生したる多くの奢侈  
 の子孫を殺して、玩物の念を嗟歎の灰の河に埋めよ。彼等は蠶兒  
 の家を奪ひぬ。汝等彼等の家を奪へや。彼等は蠶兒の智慧を笑  
 ひぬ。汝等彼等の智慧を讚せよ、すべて彼等の巧とおもへる智慧  
 を讚せよ、大とおもへる意を讚せよ、美しと自ら思へる情を讚せよ、  
 協へりとなす理を讚せよ、剛しとなせる力を讚せよ。すべては我  
 等の矛の餌なれば、劍の餌なれば、斧の餌なれば。讚して後に利器  
 に飼ひ、よき餌を作りし彼等を笑へ。なぶらるゝだけ彼等をなぶ  
 れ。急に屠るな、なぶり殺せ。活しながらに一枚一枚皮を剥取れ、  
 肉を剥取れ。彼等が心臓を鞠として蹴よ。枳棘をもて背を鞭う  
 てよ。歎息の呼氣、涙の水、動悸の血の音、悲鳴の聲、其等をすべて人



丑の刻  
今の午前二時  
寅の刻  
今の午前四時  
卯の刻  
今の午前六時  
辰の刻  
今の午前八時

より取れ。残忍の外快樂なし。酷烈ならずば、汝等疾く死ね。暴  
れよ、進めよ、無法に住して放逸無慚、無理無體に暴れ立て、暴れ立て。  
進め。神とも戦へ、佛をも擲け。道理を壊つて壊りすてなば、  
天下は我等がものなるぞ。」と、叱咤する度、土石を飛ばして、丑の刻よ  
り寅の刻、卯の刻となり辰となる迄も、毫も止まず勵まし立つれば、  
數萬の眷屬勇みをなし、水を渡るは波を蹴かへし、陸を走るは沙を  
蹴かへし、天地を塵埃に黄ばまして、日の光をもほとほと掩ひ、斧を  
揮つて數寄者が手入れ怠りなき松を、冷笑ひつゝ、ぼつきりと斫る  
あり、矛を舞はして板屋根に忽ち穴を穿つもあり、ゆさゆさ〜と  
怪力もて、さも堅固なる家を動かし、橋を揺がすものもあり。「手ぬ  
るし手ぬるし、酷さが足らぬ。我に續け。」と憤怒の牙嚙鳴らしつゝ、  
夜叉王の躍り上つて焦躁てば、虚空に充ち満ちたる眷屬をたけび  
鋭くをめき叫んで、遮二無二暴威を揮ふほどに、神前寺内に立てる

大地の髪の毛



天王寺の五重塔

樹も、富家の庭に養はれたる樹も、聲振絞つて泣悲しみ、見る〜大  
地髪の毛は、恐怖に一々豎立なし、柳は倒れ、竹は割るゝ折しも、黒  
雲空に流れて、樅の實よりも  
大きな雨ばらり〜と降  
出せば、得たりとます〜暴  
るゝ夜叉、垣をひき捨て、塀を  
蹴倒し、門をも壊し、屋根をも  
めくり、軒端の瓦を踏碎き、只  
一揉みに屑屋を飛ばし、二揉  
み揉んでは二階を捻取り、三  
たび揉んでは、某寺を物の見事に潰し、崩し、どう〜どつと関をあ  
ぐる其の度毎に、心を冷し胸を騒がす人々の、彼に氣づかひ、此に案  
ずる笑止の様を見ては喜び、居處さへも無くされて悲しむものを



九輪  
塔の頂の露盤と  
最上の水烟との  
間にある輪形の  
裝飾。普通九層  
ある。

見ては喜び、いよいよ圖に乗り、狼藉のあらんかぎり、を遅しうすれ  
ば、八百八町百萬の人みな生ける心地せず、顔色さらにあらばこそ。  
中にも分けて驚けるは圓道、爲右衛門、折角纔かに出來上れる五重  
塔は、揉まれ揉まれて、九輪はゆるぎ、頂上の寶珠は空にえ讀まぬ字  
を書き、岩をも轉ばすべき風の突掛け來り、楯をも貫くべき雨のぶ  
つかり來る度、撓むさま、木の軋る音、復る姿、又撓む姿、軋る音、今にも  
覆らんず様子なり。

(五重塔)



大抵の美の手

鹽原

栃木縣鹽谷郡に  
ある温泉地。

西那須野

栃木縣那須郡  
東北本線の驛。

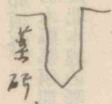
一七 鹽原

尾崎紅葉

車は馳せ、景は移り、境は轉じ、客は改まれど、我は安からざる悒鬱  
を抱きて、やる方なき五時間のひとりに、倦疲れつゝ、始めて西那須  
野の驛に下車せり。直ちに西北に向ひて、今なほ茫々たる古の那  
須野が原に入れば、天は闊く地は遐かに、たゞ平蕪迷ひ斷雲飛ぶの  
みにして、三里の坦途、一帶の重巒、鹽原はそこぞと見えて行くほど  
に路は窮らず。漸く千本松を過ぎ、進みて關谷村に至れば、人家の  
盡くるところに、涼々の響ありて、これにかゝれるを入勝橋となす。  
橋を渡りて、僅かに行けば、日光暗く、山厚く疊み、嵐氣冷やかに壑深  
く陥りて、いくめぐりせる葛折の後には、密樹に聲々の鳥鳴き、前  
には幽草歩々の花を開き、愈、躋れば、遙かに木がくれの音のみ聞えし  
流の水上は、淺く露れて、すはやこゝに空山の雷、白光を放ちて崩れ



嶺上の松云々  
拾遺和歌集、齋  
宮女御の歌に、  
「琴の音に峯の  
松風かよふらし  
いづれの緒より  
しらべそめけ  
む」とある。



箒川  
源を福島縣境な  
る高原山に發  
し、鹽原を貫流  
して那須の西南  
を劃して那珂川  
に入る。

落ちたるかと凄じかり。道の右は山をきりて長壁と成し、石幽かに  
薜碧うして、幾條とも白絲を亂し懸けたる細瀑小瀑の珊々とし  
て注げるは、嶺上の松の調べも、定めてこの緒よりやと見捨て難し。  
車を驅りて白羽坂を踰えてより、回顧橋に三十尺の飛瀑を踏み  
て、山中の景は始めて奇なり。これより行きて道あれば水あり、水  
あれば必ず橋あり、全嶺にして七十瀑。山あれば巖あり、巖あれば  
必ず瀑あり、全嶺にして七十瀑。地あれば泉あり、泉あれば必ず熱  
あり、全村にして四十五湯。尙數ふれば、十二勝十六名所七不思議、  
誰か一々探り得べき。  
そも、鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より群峯の間を分けて深  
く西北に入り、綿々として箒川の流に浜る片岨の、四里に岐れ十一  
里に互りて、到る處巉巖の水を夾まざるなきは、宛然青銅の藥研に  
瑠璃末を碎くに似たり。まづ大網の湯を過ぐれば、根本山魚止瀧

兒が淵左靱の嶮は古りて、白雲洞は朗かに、布瀑龍が鼻材木岩五色  
岩船岩などと眺め行けば、鳥井戸前山の翠衣に染みて福渡の里  
に入るなり。途すがら、前面の崖の處々に咲残りたる躑躅山藤な  
ど打眺めつゝ行くほどに、鹽釜の湯甘湯小太郎が淵など早くも過  
ぎて、いつしか畑下戸の里に著きぬ。  
一村十二戸。温泉は五箇處に涌きて、五軒の宿あり。こゝに清  
琴樓と呼べるは、南に方りて箒川の緩くめぐれる磧に臨めり。俯  
しては水石の粼々たるを見、仰げば西に富士喜十六の翠巒と對し  
て清風座に滿ち、袖の澤に落ちくる流は、二十丈の絶壁に懸りて素  
練を垂れたる如き吉井瀑となり、東北は山又山を重ねて琅玕の玉  
簾深く、一望の下、丘壑の富を擅にし、林泉のおごりを窮めらるゝな  
ど、又あるまじき清福の別境なり。我は、この繪を見る如き清穩の  
風景にあひて、かの途上嶮しき巖と激しき流との爲に、幾度か魂飛



び肉銷して、をさむる方なくかき亂されし胸の中は、靄然として頓  
 に和ぎ、恍然としてすべてを忘れてたり。  
 まことによくこそ我は來つれ。何ぞ來ることのはなはだ遅か  
 りし。山の麗しといふも土の堆きのみ。川の暢しといふも水の  
 逝くに過ぎざるのみ。牢として抜くべからざる我が半生の痼疾  
 は、いかでか土と水との醫すべきものならんと、齒牙にも懸けず侮  
 りたりし己こそ、まづ侮らるべき愚の者なれや。  
 見よ、木々の緑も、浮べる雲も、秀づる嶺も、流るゝ谿も、そばだ  
 つ巖も、吹きくる風も、日の光も、鶏の啼く音も、空の色も、皆おのづか  
 ら浮世のものならで、我はこゝに憂を忘れ、悲しみを忘れ、苦しみを  
 忘れ、勞を忘れて、身はかの雲と軽く、心はこの水と淡し。希はくは、  
 今よりかくの如くにして我が生を終へんかな。  
 (金色夜叉)

一八 あゝ大和にしあらましかば

薄田泣菫

あゝ大和にしあらましかば、  
 いま神無月、  
 うは葉散り透く神奈備の森の小路を、  
 あかつき露に髪ぬれて、往きこそかよへ、  
 斑鳩へ。平群のおほ野、高草の  
 黄金の海とゆらゆる日、  
 塵居の窓のうは白み、日ざしの淡に、  
 いにし代の珍の御經の黄金文字、  
 百濟緒琴に、齋瓮に、彩畫の壁に  
 見ぞ恍くる柱がくれのたゞずまひ。

斑鳩 斑鳩の宮。今の  
 奈良縣生駒郡法  
 隆寺村の法隆寺  
 の東院はその宮  
 址であるとい  
 ふ。  
 平群 今の奈良縣生駒  
 郡平群村。







白膠木  
 ふしの木の異名。漆樹科の落葉喬木。  
 棟  
 せんだんの異名。  
 菩提樹  
 桑科無花果屬の常綠喬木。

籬ませに、木の間に——これやまた野の法子兒の

化のものか、夕寺深く聲こゑぶりの

讀經や、——今か、靜こゝろ

そゝろありきの在り人の

魂たまにしも沁み入らぬ。

(白羊電)

日は木がくれて、諸とびら

ゆるにきしめく夢殿の夕庭寒く、

そゝ走りゆく乾ひ反葉そりばの

白膠木ぬるでえ、榎あふち名こそあれ、葉廣菩提樹、

道ゆきのさゝめき、語に聞きほくる

石廻廊いしわたどののたゝずまひ、振りさけ見れば、



高塔たかたや九輪の錆に入目かげ、花に照り添ふ夕ながめ、さながら、緋衣の裾ながに地に曳きはへし

そのかみの學生めきし浮歩み、  
あゝ大和にしあらましかば、  
今日神無月日のゆふべ、  
聖ごころの暫しをも、  
知らましを身に。

(白羊宮)

### 一九 東京の開化

島崎 藤村

「鹽まいて、おくれ。」

「鹽まいて、おくれ。」

中仙道の板橋から、半蔵が巢鴨本郷通りへと取つて、やがて神田明神の横手にさしかゝつた時、先づ彼の聞きつけたのは、その子供等の聲であつた。町々へは祭の季節が來てゐる頃に、彼も東京に入つたのである。

時節柄、人氣を引立てようとする市民が意氣込のあらはれか、町の空に響く太鼓、軒竝に連なり續く祭禮の提燈などは思の外の賑ひであつた。時には肩に掛けた襷の鈴を鳴らし、黄色い團扇を額のところ差して、後鉢巻姿で神輿を押し、行く子供の群が彼の行く手を遮つた。時には鼻の先の金色に光る獅子の後へ、同じ揃

板橋 今の東京市板橋區  
半蔵 長野縣西筑摩郡馬籠の本陣、青山吉左衛門の子。小説「夜明け前」の主人公。  
巢鴨 東京市豊島區本郷  
神田明神 東京市神田區宮本町に在る。府社。大己貴命を祭る。祭日は九月十五日で江戸大祭の一であつた。



筋違見附

東京市神田區筋

替橋(今の萬世

橋附近)におか

れた壘門。神田

見附ともいふ。

柳原

神田區筋替橋

(萬世)から淺草

橋・兩國橋に至

る神田川に縁れ

る汎稱。享保年

間、その堤に柳

多吉

を植ゑた。

半藏の知人。

ひの衣裳を著けた人達が幾十人となき随つて、手にく扇を動かしながら町を通り過ぎる列が彼の行く手を埋めた。彼は右を見左を見て、新規に掛つた石造の眼鏡橋を渡つた。筋違見附ももうない。その邊は廣小路に變つて、柳原の土手につづく青々とした柳の色が、往時を語り顔に彼の眼に映つた。

東京まで半藏が動いて見ると、昔氣質の多吉の家ではまだ行燈だが、近所には已にランプを使つてゐるところがある。夕方になると、その明るい光が町へ漏れる。あそこでも、こゝでもといふ風に、燈火すらこんなに變りつゝあつた。

今更、極東への道をあけるために進んで來た黒船の力が、神戸・大阪の開港開市を促した慶應三、四年度のことを引合に出すまでもなく、また、日本紀元二千五百餘年來、未曾有の珍事であるとされた

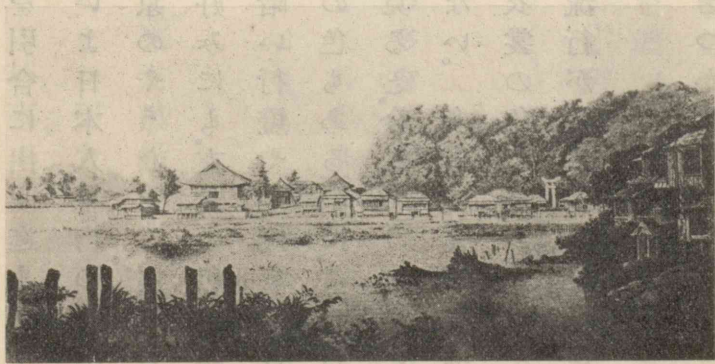
あの外國公使等が京都參内當時のことを引合に出す迄もなく、世界に向つてこの國を開いた影響は、いよいよ日本人各自の生活にまで現れて來るやうになつた。殊に、東京のやうなところがさうだ。半藏はそれを都會の人達の風俗の好みにも、衣裳の色の移り變りにも見て取ることが出來た。うす暗い行燈や蠟燭をつけて、夜を送る世界には、それによく映る衣裳の色もあるのに、その行燈や蠟燭に替る明るいランプの時が來て見ると、今までうす暗いところ、で美しく見えたものも、最早見られない。多吉の妻お隅はさういふことによく氣のつく女で、近頃の衣裳の色の變つて來たことなどを半藏に言つて聞かせ、世の中の流行が變る前に已に燈火が變つて來てゐると言つて聞かせる。

多吉夫婦は久し振り、で上京した半藏をつかまへて、いろくんと東京の話をして聞かせ、寄席の藝人の口にするものまで、英語まじ



りが流行して来たと言つて半藏を笑はせた。お隅は、一鵬齋芳藤  
 畫くとした浮世繪などをそこへ取出し  
 て来る。舶來と和物との道具くらべが  
 それぞれの人物になぞらへて、時代の相  
 を描き出してゐる。その時になつて見  
 ると、遠い昔に、漢土の文物を採入れよう  
 とした初の頃の此の國の社會もこんな  
 であつたらうかと疑はれるばかりであ  
 る。海を渡つて来るものは、皆文明開化  
 と言はれて、散切頭を叩いてみただけで  
 も、開化した音がすると唄はれるほどの  
 世の中に變つて来た。夏は素裸禪一つ、  
 冬は襦袢一枚で、客があると、どんな寒中

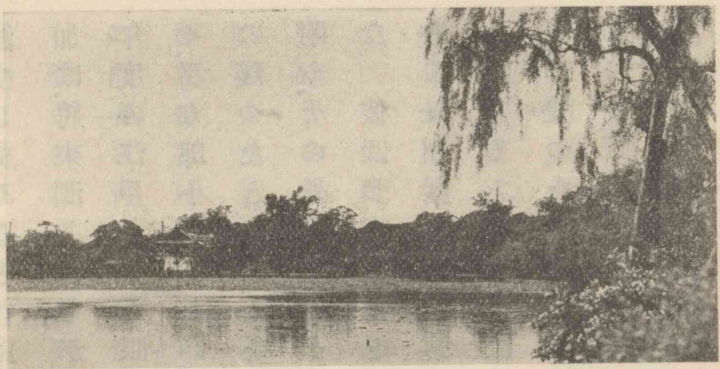
散切頭を云々  
 當時の俗語に、  
 「散切頭を叩い  
 てみれば、文明  
 開化の音がす  
 る。」



昔の上野

佃

東京市京橋區佃  
 島をいふ。靈岸  
 島の東の堆洲で  
 白魚・あさり等  
 の産地。



でもないくらいであつた。こゝに住む老若男女の數も、彼には凡そ

でも丸裸になつて、「ほい籠、ほい籠」と駈け  
 出す駕籠屋などは最早顔色が無い。年  
 中素肌の魚屋から、裸商賣の佃から来る  
 あさり賣まで、異國の人に對しては、自分  
 らの風俗を赤面するかに見える。  
 旅の身の半藏は、用達のついで、或は同  
 門の舊知などを訪ねるため、あちこちと  
 出歩く折毎に、町々の深さを知つて見る  
 機會を持つた。東京は、何程の廣さに伸  
 びてゐる大きな都會とも、ちよつと見當  
 のつけられないことは、以前の彼が江戸  
 出府の折に得た最初の印象とさう變り



元治年度

孝明天皇の御代。(二五二四)

一年で慶應に改元。

自身番

江戸時代、江戸の町々の四辻に置いた番屋の稱。

番太郎小屋

自身番に附屬した小使が自身番の傍に構へて住んだ小屋。

本所相生町

東京市本所區相生町。

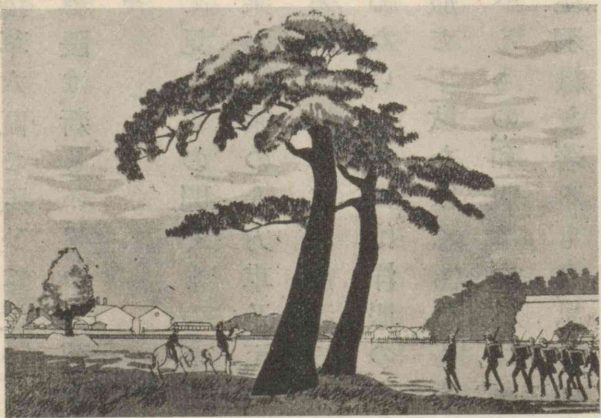
日比谷

東京市麴町區日比谷。

何程と言つて見ることも出来ない。或は江戸時代よりはずつと減少してゐると言ふものもあるし、或はこの新しい都の人口の増加は、將來測り知りがたいものがあらうといふものもある。元治年度の江戸を見た眼で、東京を見ると、今は町々の角に自身番もなく、番太郎小屋もない。纔かに封建時代の形見のやうに木戸のみの残つたところもある。舊城郭の關門とも言ふべき十五六の見附や、その外廓にめぐらしてあつた十個所の關門も、多く破壊された。彼は多吉夫婦と共に、以前の本所相生町の方にゐて、日比谷にある長州屋敷の打壊しに出逢つたことを覚えてゐるが、今度上京して見ると、その邊は一面の原だ。大小の武家屋敷の跡は桑園茶園に變つたところもある。彼が行く先に見つけるものは、曾て武家六分町人四分と言はれたこの都會に、大きな破壊の動いた跡を語つて見せてゐないものはなかつた。でも、東京は發展の最中だ。

銀座二丁目・竹川町・銀座四丁目  
何れも東京市京橋區内にあつた町名。

舊本陣問屋時代に宿場と街道の世話をした經驗のある半藏は、評判な銀座の方まで歩いて行つて見て、そこに擴げられた道路をおよそ何間と數へ、めづらしい煉瓦建築の竝んだ二階建の家々の窓と丸柱とが、何れも同じ意匠から成るのを眺めた。そこは明治五年の大火以來、木造の建物を建てることを禁じられてから出來た新市街で、最初は誰一人その煉瓦の家屋に入る市民もなく、もし住めば必ず青ぶくれにふかれて死ぬ、と言囃されたといふ話も残つてゐる。言つて見れば、その頃の銀座は香具師の巢である。銀座二丁目の熊の相撲、竹川町の犬の踊、四丁目の角



筆親清林小 堀慶辨田櫻の年初治明



浅草六區  
東京市浅草區淺草公園を七區に分ち、大池の西から南にかけての二帶を六區といふ。

の貝細工、その他、砂書、阿呆陀羅、輕業などのいろ／＼の興行で東京見物の客を引きつけてゐるところは、浅草六區の賑ひに近い。目ざましい繁昌を約束するやうなその界限は、新しいものと舊いものとの入れ混りで、雜然紛然としてゐた。  
今は、旅そのものが半藏の身にしみて、見るもの聞くものの感じが深い。最早駕籠も廢れかけて、一人乗・二人乗の人力車乃至乗合馬車がそれに換りつゝある。行過ぎる人の中には洋服姿のものを見かけるが、多くはまだ身につけてゐない。中には洋服の上羽織を著るものがあり、切下げ髪に洋服で下駄をはくものもある。長髪に月代をのばして仕合道具を携へるもの、和服に白い兵兒帶を巻きつけて靴をはくもの、散髪で書生羽織を著るもの、思ひ／＼である。まつたく十人十色の風俗をした人達が、彼の右をも左をも往つたり來たりしてゐた。  
(夜明け前)

二〇 表現せざる表現

志田義秀

志田義秀  
國文學者。文學博士。東京帝國大學講師。富山縣の人。明治九年生。  
維摩  
維摩詰。釋迦と同時代でその教化を輔けた。  
山谷  
黃庭堅、山谷と號した。宋の詩人。

「言はぬは言ふにまさる」と云ふことは、世の中の人々が能く云ふことである。それでゐて饒舌を逞しうせずにもられぬのが人の常である。「維摩の一黙、その聲雷の如し」と云ふやうに、沈黙は雄辯であることも吾々は承知してゐる。それでゐて沈黙であり得ないのが吾々の常態である。詩人山谷は「萬言萬當不如一黙」と云ひながら、多くの詩を作つてゐるのである。  
然るにこの言ふにまさる無言、沈黙の雄辯が、藝術の形式として取扱はれ、こゝに恐ろしい藝術が出来上るのである。南畫の餘白、俳畫の省筆、茶道の靜寂、禪の默想、能樂の中入、邦樂の間、俳句の句切などが即ちそれである。茶道の靜寂、禪の默想も、藝術的境地と見られよう。言ひかへれば、表現せざる表現が、表現以上の藝術



大須賀乙字

名は續。俳人。俳論家。前東京音楽學校教授。大正九年歿。年四十。

世阿彌

觀阿彌の子。名は元清。室町時代に於ける能樂の改革者。嘉吉三年歿。年八十。I. (1101) 三十一 (1101) 三十一

志田義家

的效果を收め得るので、かゝる藝術的形式を發達せしめて、今日猶完全に之を持續してゐるのは、恐らくは我が日本のみであらう。この事に就いては大須賀乙字が特に論じて居り、早く氣づいてゐる人もあるのであるが、私も茲に蛇足を試みようと思ふのである。能樂の改革者として、むしろ嚴格な意味に於ける能樂の創始者として、作舞・作詞・作曲凡てに天才を有し、優れた作家で同時に優れた評論家であつた世阿彌は、その能樂觀を述べたものの中に、動くことを表すには動かないことを以てせねばならぬと云ふ意味のことを述べてゐる。激動を表すには無動を以てするのが有効であると云ふのである。當流には「總て早態戒むる也」とも云つてゐる。世阿彌は、かゝる藝術觀を以て猿樂の改革を謀つたので、従つて世阿彌以前の猿樂は、激動は激動を以て表す主義のもので、跳躍的の舞踏劇を基本となしたことは、この點からも推せられるの

マールブルヒ大學

獨逸にある大學。獨逸最初の新設大學。マールブルフ・オート  
一九一七年から一九三〇年までマールブルヒ大學に勤む。(一八六九)

で、世阿彌に至つて、始めて表現せざる表現の効果を認めて、暗示的・象徴的の手法に依る、高級な象徴的藝術たる今日の如き能樂を打建てたのである。されば能樂は、その中入を考へるまでもなく、能全體が既に表現せざる表現の主義に依つてゐるもので、従つて形式全體として、茶道の靜寂、禪の默想、俳畫の省筆に類すると云へるのであるが、而もかゝる全體の形式と共に、その燒點たる妙所をなすものは中入であるから、かゝる全體觀から云へば、能樂は、餘白を有する暗示的繪畫たる南畫、句切を有する暗示的文學たる俳句に類すると云へるであらう。私はかつて友人から、マールブルヒ大學の神學教授ルートドルフ・オートト氏の「聖」といふ神學書の所説を聞く事を得た。同書は、神に對する感情を髣髴せしめ得るものは、音樂を聞く時の感情であるとし、それも樂曲を聞きつゝある時の感情よりも、曲を終へて樂



器が静寂に歸し、聴衆が沈黙を守つてゐる時(同書はこゝに「沈黙」といふ言葉を用ひてゐるさうであるが)の感情であると云つてゐるさうである。私は之を非常に面白く聞いたのである。

終曲の後の沈黙が、神に對する感情を髣髴せしめるものであるとの所論は、吾々には如何にも耳よりな論である。終曲後の沈黙にこれ程の至妙至靈の意義を考へるのは、やがて藝術上に於ける表現の至妙至靈の効果を認めるものと云へるであらう。而も奏樂後の沈黙といふことは、何れの國に於ても共通的に考へられることであるが、我が國に於ては、それ以上にそれが音樂に於ける間や能樂に於ける中入として存するのであり、又同じ意義のもとして、茶道や禪に全體的形式として存するのであり、音樂以外のものとしては、南畫の餘白、俳句の句切として存するのである。西諺にも、言談は銀、沈黙は金といふやうである。オットー氏の

この見方は、畢竟沈黙の雄辯といふことを強調して考へて、そこに神秘的の或物の存在を認め、一面又宗教味と藝術味との極致に於ける一致といふことにも觸れてゐると思はれる。

彼の地の表現主義といふものが、我が國の一部でも奉ぜられてゐるやうである。併しながら、彼の表現主義なるものは、自然主義の唯物的思想の反動としての唯心的の思想が、種々な主義を生み來つた後、遂に極端に行きついて生じたもので、世界大戰の慘禍を経た彼の地の國民の生み出したもの、又生み出すべきものであつたのである。今猶未完成の主義と見られてゐるやうでもあり、又彼の地の國民に於て始めて意義あるものと思はれる。我が國の非表現的表現主義は、無主義も又主義であると同じ意味で、やはり一種の表現主義と云へるけれども、彼の表現主義とは、歴史を異にし、その意義を異にすると共に、悠久性を帯びるものであるが、世界



文化交流

的に文化交流の行はれつゝある今日、そして彼に於て東洋研究、特に日本研究の盛んになりつゝある今日、彼の地の思想界或は藝術界の一面に迎へらるべき可能性があると思ふのである。要するに藝術は、必然な内心の要求から生れるものであるとすれば、大戦の慘禍を直接に経験した結果の焦燥と絶望とを感じない我が國の國民に、彼の表現主義のやうな藝術が必然に生れねばならない理由が、私には發見されない。由來我が國民は、嘗ては對岸の大陸に對し、明治以來は歐米に對して、餘りに受動的であり、輸入的であり、摸倣的であると共に、自己の有するものの價值と尊さとを忘れ勝であつた。そして我が國の浮世繪に據つて創造されたゴーホの畫が、我が國に逆輸入的に迎へられたりもしてゐるのである。受動的であるばかりが國民の能ではないであらう。

(俳文學の考察)

ゴーホ  
佛蘭西で活躍した和蘭の畫家。  
(一八五三—一八九〇)

伊原青々園

本名敏郎。文學博士。日本演劇史家。松江市の人。明治三年生。

出雲のお國  
歌舞伎踊りの創始者。慶長頃の人。

二二 日本戲曲の三形式

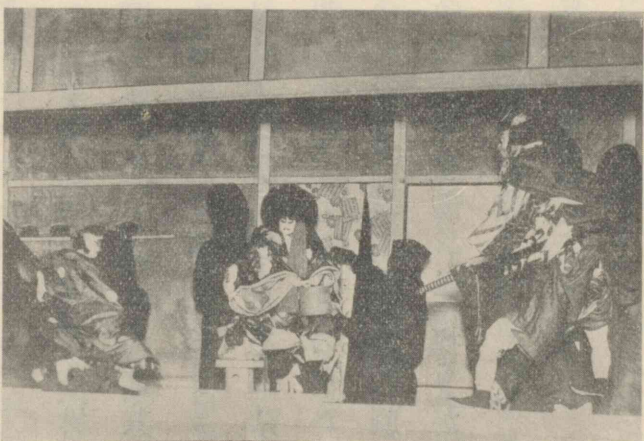
伊原青々園

日本の戲曲は、三つの異つた形式で發達して居る。三つの異つた形式とは、其の一が能、其の二が操り、即ち人形芝居、其の三が歌舞伎である。芝居の始まりといへば、誰でも出雲のお國の女歌舞伎を引合ひに出すが、あれは大間違ひである。此の三つのうちでは能が一番古い。其の前から日本に唱歌や、舞踊は色々あつた。しかし其の唱歌や舞踊に、劇的のプランを加へたものは、能が最初であつた。さうして操りが其の次で、歌舞伎は操りよりも更に遅れて發達したものらしい。遅れて發達した代りに、能や操りよりも廣く行きわたつて居る。且能や操りが衰微した後までも全盛だつたのである。

しかし、能や操りも全く滅びたのでは無い。東京には九段坂上



文樂座  
今大阪市南區  
谷西之町にあ  
る。



をはじめ諸所に能舞臺といふのがあつて、今でもそれを實演して居る。大阪には文樂座といふ操りの劇場が存在して、これも現に興行をつゞけて居る。昔と寸分違はぬといふ譯には行くまいが、しかしながら其の面影だけは見ることが出来る。歌舞伎は能や操りよりも盛りは長いが、昔の面影を残して居る形といふ點では、却つて能や操りに劣つて居る。それは時代によつて内容の變化して行くことが、餘りに眼まぐるしいほどいそがしいからである。とにかく日本の戯曲の三つの形式たる能と操りと歌舞伎

とが、何れも其の正體を今日まで存して居るといふ事は、其れを研究する吾々の爲に幸福だと言はねばならぬ。

そこで、具體的に此の三つの相違を説明すると、能では俳優が劇中の人物に扮するが、服装だけをして化粧をしない、そして化粧する代りに假面をかぶるのである。操りでは、俳優の代りに人形つかひといふ者があつて、その人形つかひは、自分が劇中の人物に扮しない代りに、木偶を劇中の人物として動作せしむるのである。更に歌舞伎では、俳優が劇中の人物に扮することは能と同じであるが、自身の肉體に化粧もすれば服装もする。決して假面を用ひないのである。尤も、歌舞伎でも假面を用ふる場合が無いではないが、それは例外で、且極めて稀である。

それから、能には「謠」といふ音楽が伴なつて、其の「謠」の詞句は、對話と敘事、即ち地の文とを含んで居り、これを俳優自身と「地うたひ」と



稱する合唱團とが交るくうたふのである。例へば其の「安宅」と題する曲のうち、辨慶の一行が富樫の見張つて居る關所へ來て、主君義經を變装させる所で、

「あの強力が負うたる笈を」

と辨慶がうたふと、義經が、

「義經とつて肩にかけ」

とうたひ、つゞいて家來一同が、

「笈の上に雨皮あまがは形箱とりつけて」

とうたひ、更に義經が、

「綾菅笠にて顔をかくし」

とうたひ、家來一同が、

「金剛杖にすがり」

とうたひ、義經が、

「足いたげなる強力にて」

とうたひ、その次の、

「よろ／＼として歩みたまふ御有様ぞ痛はしき。」

を「地うたひ」でうたふのがそれである。

操りでも、謠の代りに「淨瑠璃」といふ音楽が伴なつて居り、其の詞句が對話と敘事とを含むことも、謠のとほりであるが、俳優と合唱團とによつて之を分擔せずして、對話も敘事も、すべて樂座が唱ふのである。例へば「一の谷」の陣屋の段で、「物語らんと座を構へ」といふ句は敘事で、次の「さても去んぬる六日の夜」からは熊谷の對話であるが、何も彼も淨瑠璃で語つて、人形は其の淨瑠璃につれて、表情や動作をするだけである。これは口利けぬ人形であるから、止むを得ないのである。

歌舞伎でも「唄」又は「淨瑠璃」の音楽が伴なふ場合には、能のやうに



俳優と合唱團とが交るくうたふか、もしくは操りのやうに樂座へ一任して、俳優自身は、木偶の如く口を利かないか、孰れかであるが、其等は極めて稀な特別の場合であつて、普通では俳優各自が銘の對話をいふのである。

以上述べた能と操りと歌舞伎とが、即ち日本の戯曲の重要な三形式である。就中、歌舞伎は過去に於ける日本の戯曲のうち最も新しき形式であつて、能も操りも其のうちに織込まれて居ることを考へれば、歌舞伎劇の歴史は、日本戯曲史の全部であるとは言へないが、すくなくとも其の大部分であると言つて差支ないと思ふ。

藤懸靜也

文學博士。美術批評家。東京帝國大學教授。茨城縣の人。明治十四年生。

二二 美術に現れた日本國民性

藤懸靜也

美術は、その國の文化の華の開いたものであり、一國の文化は、その國民性を背景とするに至つて、始めてその光輝を發するものである。歴史を顧みれば、各國の文化には、その國民性を背景とした大きな流が、明瞭に認められるものである。

現代に於ては、我々がその社會の渦中にあつて、種々の文化の傾向を見てゐる爲に、如何なる文化が眞にその國民性に適應すべきものであるか、甚だ不明瞭な場合が多い。今、繪畫に例をとつて見るに、舊來の日本畫と油繪と對立してゐるが、これを若し、極く若い者が見るとしたならば、油繪の方が日本の國民性に適するものであると言ふであらうし、中年以上の者は日本畫の方が適しはしないかと考へるであらう。しかし、それは人々の考へやうで、西洋思



想に多く親しんでゐる者には西洋畫が好まれ、日本のものを多く見てゐる者には、日本畫が好まれ易いのである。併しながら我等は、日本國民全體の上から、その文化や趣味の傾向を考へねばならぬ。

即ち過去の時代に溯つて、その時々々の文化の變遷を見、藝術の變化の跡を見、而して更に現代の渾沌たる社會に對し、又藝術界に就いて考へて見ると、その間に或一筋の光明を見ることが出来る。美術に現れた日本國民性の如何なるものであるかといふことも、大凡は考察することが出来る。

さて、誰しも日本は美術國だといふことを口にし、また實際それに相違は無いが、實は我が國の造形美術は主として印度支那朝鮮等の美術の優れた所を攝取消化して大いに發達を成し遂げたものである。上代から大陸文化の刺戟を受けて、興隆の氣運に接し

たのである。我が國に藝術が開けてから此の方、その間幾多の變遷があり、幾多の名家を出し、世界に誇るべき優秀なる藝術品を産出してはゐるが、それらは多くは外來文化の影響を受けて出現したものである。もしかゝる外來文化の刺戟を受ける事が無かつたら今日残つてゐるやうな名作の數々は見るを得なかつた筈である。併しながら此處に考ふべきは、縱令その範を彼に仰いだにしても、それを我が國の趣味・風俗に適するやうに全部を改めてゐる。換言すれば、彼から受けた文化を更に日本化したものであり、この外國文化が消化されて、始めて我が國の特色が發揮されたのである。同じく大陸の影響をうけても、朝鮮の如きは、常に支那大陸その儘の文明を入れて、それを自國化することが出来なかつた。これ即ち朝鮮と我が國とが、根本的に相違してゐる所であり、日本文化が榮え、朝鮮の文化が獨得の光をなさない所以である。此處



推古朝

第三十三代推古天皇の御代を云ふ。(一五二一—一五八八)

六朝式 支那の吳・東晉・宋・齊・梁・陳の六代の頃の文化形式。

に、我が國民性の發露を見ることになり、藝術に於て、全く支那大陸とは違ふ別種のものとなりおほせて居るのである。かやうな經路を考へつゝ、今遺存してゐるものに就いて考察して見よう。さて、我が國の最古の藝術品として考ふべきものは、推古朝の藝術である。これは朝鮮半島を經由して、所謂六朝式を入れたのであるが、これは云ふまでもなく、聖德太子の偉大なるお力によるもので、その當時出來得る限り大陸の文化を吸収して、我が文化に盡されたことは、我が國の今日ある基を開かれたといふべきである。



彌勒菩薩 廣隆寺

この時に於ける我が國文化の變化は、明治維新の時、歐米文明の影響を享けて、變化したものと違ひ、全然大陸文明化したものであ

る。今日その當時の遺物として考ふべきものは、法隆寺及び其處にある寶物で、當時の盛觀が偲ばれる。

次の奈良時代は、所謂天平時代で、誰しもその盛大なことを知つてゐるが、奈良附近を旅行してその當時を偲ぶものは、建築に於ても、彫刻に於ても、驚くべき發達をしてゐたことを認めるであらう。これ等は唐朝の文明が直接日本に入つたもので、これに依つて

益、我が文明の基礎は確立されたのである。従つて當時の文明は、總て支那かぶれで、その服裝・建築・調度類を始め、日常生活の様式に至るまで、悉く支那的である。是に於て支那的趣味が十分我が國



迷企大羅將 新藥師寺



を支配したのである。併しこれは、その當時中央都會に於ける一部のことで、我が國民全體がかやうな文明を持つたのではなく、都會を一步離るれば、なほ多くは文化の光に浴しない人々であつたのである。併し、この一部の者の文化が、後代の發達の根柢をなして居ることは、見逃すべからざることである。

かやうにして入つた大陸文明は、やがて、我が國に適するやうに、色々に變化し、次の平安時代には、遂に我が國民の自覺により、こゝに日本特有の文化を生ずるに至つた。これは、實に我が國の文化の尊き所以であつて、大陸文明の精神を消化し得たことに依るものである。



高山寺戲畫卷

定朝  
佛工。京都七條  
佛師の祖。京都  
の人。天喜五年  
(一七一七)歿。

運慶  
名は譽。備中法  
印といふ。康慶  
の子。彫刻家。  
歿年未詳。  
湛慶  
運慶の子。尾張  
法印といふ。彫  
刻家。歿年未詳。

平安時代に至つて、國文學が發達し、藝術に於ても舊來見ることの出來なかつたものが起り、更に鎌倉時代にこれが完成した。しからば、我が日本文化の基礎は、推古時代・奈良時代にあるとしても、それを純日本化して、我が國獨特の精華を發揮したのは、平安時代及び鎌倉時代であるといふべきである。

鎌倉時代には、文化は漸く貴族以外のものにまで及び、前時代よりもなほ一層文化の度を擴げることが出來た。即ち平安時代の宮廷及び搢紳の文化が、鎌倉時代に入つてからは、普遍的の性質を帶び、かつ國民的藝術の發達を遂げてゐる。これを彫刻に見れば、天平時代は、その粹を極め能を盡してゐるが、これ實に唐朝彫刻の摸倣である。然るに平安時代の終りに、定朝出で、鎌倉時代に運慶・湛慶が出で、寫實的な作風を以てし、此處に純日本の彫刻が出現したのである。

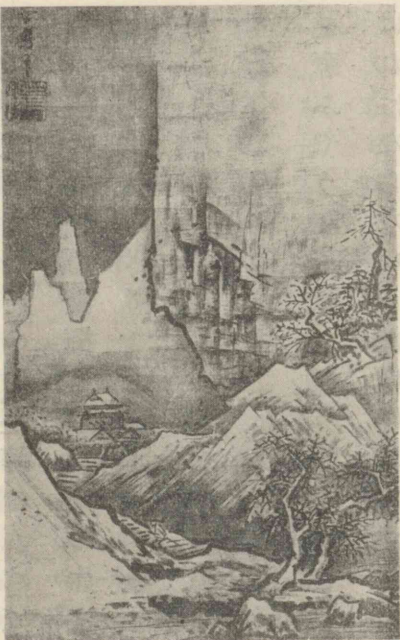


大和畫  
我が國風の畫を  
支那風の畫に區  
別していふ語。

これを繪畫の方面から考察すれば、早く佛畫の一體が、可なり精妙な域に達してゐたけれども、平安時代に國文學の展開を見るに及び、純鑑賞的な、宗教的ならざるものが發達して、我が國特殊な繪畫が現れてゐる。而してこの流は、平安末期から鎌倉時代に至つて益、榮え、所謂大和畫の一體を大成するに至つたのである。その描くところは、神社・佛寺等の緣起、或は高僧の繪傳等が少くないが、それ等の繪は、當時の實社會を率直に描き出してゐて、その題材とするところは、悉く我が國のことであり、我が國の風俗を描き現して、純粹の日本畫の大成を遂げたのである。大和畫の名稱は、漢畫に對する名であるが、これが日本繪畫の本流をなしてゐるのである。従つてこの大和畫を見れば、平安・鎌倉兩時代に於ける日本人の藝術に對する趣味を了解することが出来るのである。然るに、その後、鎌倉末期から室町時代にかけて、藝術界に特殊な

如拙 畫僧。もと明の州に來た。後、京兆に出た。畫を明に學んだ。  
周文 字は等慶。號は越溪。畫僧。近江の人。  
狩野派 日本畫の一派。支那の北宗畫から出て、剛健の筆致を用ひた。明應頃の狩野正信を祖とする。  
雲谷 本姓源氏。雲谷等顔。名は治平。畫僧。肥前の人。  
蕭白 曾我蕭白。名は輝一。畫家。天明元年(一八四一)歿。  
土佐光信 畫家。土佐三筆の一人。大永五年(一八五五)歿。  
東山時代 室町時代の一區劃。美術・工藝の

一派を生じて來た。これはいふまでもなく、當時の新派で、新に支那から入つて來た宋・元墨畫の一體で、禪宗趣味と關聯して、我が國藝術に一新様を劃したのである。即ちこの派には、如拙・周文・雪舟等の大家が出でて、その根本をつくり、次いで狩野派が榮え、雲谷・蕭白の力によつて、舊來の大和畫を全く打壞してしまつた。その當時の大和畫界では、纔かに土佐光信が餘喘を保つ位に過ぎず、殆ど此處に大和畫の覆滅を見たのである。然るに世は戰國



山水圖 雪舟筆

ある。東山時代は、この流派の最も盛んな時で、水墨減筆の一體が旺盛を極め、我が日本藝術の大きな流を成した。然るに世は戰國



時代区分に用ひられる。即ち將軍足利義隆が東山銀閣に退隱してから約九箇年間にいふ。墨の濃淡を利用し色彩を加へず筆かすを省略する一體

時代となり、此處に日本の社會に大變革を生じた。かやうな時代では、英雄豪傑が徒手空拳を以て一國一城の主となつたので、是等の人は天真爛漫の趣味を發揮して、舊來の如き禪味を帯びた藝術では、満足すべくもない。しかもそれ等の人々には學問がなく、支那趣味を解さないから、俗眼を奪ふやうな華麗を極めたものでなければならぬ。此處に於てか、花鳥動物などが描かれ、又當時の社會状態を描いた新しい風俗畫が起つたのである。畫家はその新時代の要求に應じて、純日本的な立場に立ち、鎌倉時代の繪卷物から範をとり、新時



櫻花圖 筆者未詳

光悦 本阿彌光悦、江戸初期の畫家。刀劍の鑑定家。畫をよしくした。寛永十四年(一六三七)没。宗達 依屋宗達、野々村氏名は以悦、號は對青軒。寛永年間(一六二五-一六五三)の畫家。寛永二十八年(一六五三)没。人登(石川縣)の能年(一六三六-一六六二)三〇三

代の要求に應じたものを作つた。當時の豪傑は、生れながらの日本人で、言換へれば純日本趣味の日本人である。されば鎌倉時代から範をとつた日本趣味の藝術をもつて、その趣味に應じたのは當を得たことであつた。これをもつて見ても、大和畫が、日本藝術の大本で、國民性に叶つたものであることがわかる。されば桃山時代から江戸時代の初期までは、日本文藝復興の時期で、その後は更に日本趣味の發達した時代である。徳川三百年の間は、纒かに長崎の一角から外を見てゐたに過ぎず、内地は益々日本趣味に榮えた。而して、種々の流派が生じ、藝術の燦爛たる花の時期となり、我が日本藝術の盛んな時代を出現したのであつた。光悦に始まり、宗達、光琳を経て抱一に至る一派の如きは、その範を大和畫にとり、更にこれを醇化したものである。又近世風俗畫の一體の如きは、やはり範を鎌倉時代の繪卷物にとつて起つたも







時代に、我が日本國民性の發露を窺ふことが出来る。藝術が一國文化の華であり、國民性の發露したものであるとすれば、幾多の藝術の流派は、その時の日本國民性を現したもので、その大本である本流が、我が日本を代表したものであると言はねばならぬ。然らば平安時代・鎌倉時代の本流及び江戸時代の本流が、即ち我が日本國民性を最もよく現したものと見るべきである。

要するに、國民性はその國民の住する國土に深く根ざして居り、總ての美術、總ての文化は、皆その國土と特殊な關係を結んで居る。美術殊に繪畫は、自然の摸倣を離れ難いために、益々その國土と密接な關係を持つのである。これまでの傾向を見ると、何時でも外來のものが加はつて、こゝに新しい生命を加へられたが、現代のやうに外來の刺戟の多い時には、何れを何うと見定めることは頗るむづかしいことであるが、やがてこの刺戟によつて我が國の傳統的

なものから新しいものが生れ、而してこれがまた國民性を代表することになるのである。

されば國民性の如何なるものなるかを簡単に説明することは、容易でないとしても、美術にあらはれた本流、例へば大きな畫風の變遷の上には、よく國民性の移り變りを窺ふことが出来る。即ち國民性は、美術の上に形として表されて居るから、美術の研究は國民性の考察に多大の便利を與ふことになるのである。



土居光知

英文學者。東北  
帝國大學教授。  
高知縣の人。明  
治十九年生。

### 二三 國民的文學の發達

土居光知

奈良時代の文學は、主觀的な私の眼覺めであつて、人生の充實した刹那の體驗の歌である。平安時代に於て、反省する心が眼覺め、人生が連續の相に於て眺められた。鎌倉時代に於ては、反省する心自身の自己反省に深まつて、人生が永劫の相に於て眺められた。藤原氏によつて政權が私有せられた時代には、國家的感情は全く萎縮して、人々の性情は中庸或は情趣的調和の理想に依つて放逸に流れることを防がれ、文學もそれと平行して、實感を美の典型にまで高めて優雅に表現しようとなつてゐたが、反省が深まるに従つて現實と理想との矛盾が強く感ぜられ、貴族の浮華な享樂生活と佛法に依る宗教生活との對立が漸次に著しくされた。道長の豪華な美的生活は、この對立を蔽はんとする努力を含み、源氏物語

は情趣生活によつて現實と理想とを調和しようとして描き出された世界ではなかつたらうか。而して藤原氏の榮華が衰微し、彌縫と華飾とによつて内部の虚弱と矛盾とを隠して來た文化が行詰つたとき、人々はつれづれになやみ、あるものは過去の追懷に耽り、あるものは分裂した刹那の感興に感傷的な心持を忘れようとし、あるものは社會的生活を意義のない虚妄の生活であるとし、心の内なる世界に閉籠つた。鎌倉時代の宗教は、この最後の態度の深まりであるが、しかし最初それは極めて主觀的なものであつた。主觀に沈潜することは、その奥に超主觀的なものを見出さなければ、萬物を個人の孤獨な夢想とするに至る。平安時代末期の人々は、現實と夢との區別もなく、佛の安樂國を夢みるに過ぎなかつた。夢が賣買され、妖怪變化怨靈等が人々の想像を充したのはこの時代である。外的生活



更級日記  
一卷、菅原孝標  
の女の著。

から離れて心の世界に生きた最初の記録は、更級日記である。その作者は、初め物語の空想のうちに生き、次第に夢の宗教の世界へ没入して行つた。方丈記や山家集はこの心の續きである。この時代に於て我が國人の心は始めて地から離れ、心自身が創る世界のうちに住まうとした。平安朝の主觀的な心は、超主觀的な精神の發現により、三方面から光被された。

第一は、更級日記等に見られる平安時代の感傷的な精神生活の深まりであつて、主觀の奥に佛心を認め、それに歸依した法然親鸞の宗教であり、第二は、平安時代の感傷的な心を正面から否定して、法の世界を直視せしめようとした禪宗、第三は、未だ感傷的になつてゐなかつた關東人の强健な心を以て、法華經の信仰の基とした日蓮の教である。佛教史家は、これ等を傳來の宗學の發展にのみ結び附けがちであるが、當時輩出したこれ等偉人の意義は、時代精

禪宗  
時教の一派。即ち臨濟宗・曹洞宗・黃蘗宗の總稱。

五山文學  
鎌倉・室町時代、五山等の僧侶の間に流行した文學。主として漢詩・漢文。

春秋時代  
支那、周の王室東遷後王權衰へ五霸五に興つて諸侯の會盟を司つた時代。

神の展開のうちに見出さるべきものではなからうか。

法然・親鸞・日蓮の消息・著述や、五山文學等を、國民的文學から度外視するは、平安時代を通じて流れてきた思想の進路をきはめぬことである。

古代人の求めた超個人的なものは、皇室中心の國家として確立された。鎌倉時代には、それが佛法の精神的理想國として欣求された。當時の現實の國家は、この理想國とは没交渉であつて、殺伐な戰亂の巷であり、それを厭離することに依つて理想國に往生すべきものであると考へられたが、江戸時代となるに及び、兩者一致の方へ第一歩を、明治時代に於て第二歩を進めたのである。平安時代まで人心を導く目的になつたものは、美的理想であり、鎌倉・室町時代に於ては宗教的覺照であり、江戸時代の人心を支配せんとしたものは儒教道德であつた。支那の春秋・戰國時代を経て成立



戰國時代

支那、周の威烈王以後、秦の始皇帝が天下を統一するに至るまでの時代。

した道德、我が國の戰國時代の後に採用されたこの道德は、人間性を肯定し、この自由な成長を激勵する理想である筈がなく、秩序儀禮を重んじ、本能を卑しめ、感情を輕んじ、個性を抑壓するものであった。その道德は人性を現にある状態の中から誘導しようとはせず、外から壓迫した。この時代に於ては、社會上にも倫理上にも個人の自由はなかつたので、自由を戀ひ求めるものは、自然のうちに隱遁して、解放を感じて、生の充實を味はんとした。これ即ち、俳諧の世界である。

江戸文學の思潮は、三つの流をなしてゐた。第一は、平家物語神皇正統記等よりあらはれ始めた國家意識のめざめであつて、日本は神國であり、皇室は神聖であるとし、正しい國家に復歸しようとする思想であつて、國學者の活動となり、古典文學の復興となつた。第二は、漢文學であつて、國民の教育者となり、政治の擁護者とな

つたが、これは緊張した時には第一の思想と結合し、弛緩したときには第三の傾向に近づいて風流な詩文の遊戯となつた。第一、第二は、超個人的なものを實現しようとする精神で、その文學は學者の文學であつたが、第三は、個人の自由な充實した生活を追ひ求める傾向であつて、之が平民の文學であつた。この精神は振れ曲つた道をとらざるを得なかつた。かの窮屈な社會をのがれて、洒落と茶化しに限りなき寂しさを紛らしてゐる飄逸な文學は、自由を求め、生の充實にあくがれた結果であつて、かゝる文學に高い價値を與へることは不可能であるけれども、文學の創造的な精神は、この流のうちに命脈をつないできたことは、認めなければならぬ。或はこの文藝が、かゝる時代の道德觀を迎合しなかつた故に、創造力を涸渴せしめなかつたとも考へられる。而してこの文學も、初めは第二の精神の影響をうけて、御伽草子や假名草子のやうな啓

假名草子

江戸時代の寛文前後に出た平易通俗な假名文の小説・雜著の總稱。



蒙の文學から始まり、やがて西鶴の浮世草子のやうな放縱な個人の歡樂を主題とする惡の華となり、近松に於ける如く義理と人情との葛藤を描く文學となり、再び第二の思想に壓迫されて、享樂に興味をつなぐものにも勸善懲惡の衣裳を纏はした。この三つの流は、明治になつても融合することはなかつた。即ち國家の教育精神は、第一及び第二の思潮に基礎を置いてゐるが、文藝思想は第三の流の繼承であつて、勸善懲惡の衣裳を投げすて、西鶴や近松を復活し、個人主義と享樂主義を赤裸々に強調し、かゝる思潮と共鳴する西洋の文學を移植した。かくて國民教育の精神と文藝思潮とは、互に理解し協力することなく、前者は後者を誘導する力もなく、唯壓迫し排除しようとし、後者は前者を迎合して純眞な創造力を、その源泉から涸渇させられることを恐れ、個人生活のうちに沈潜した。明治文學の創造者の多數は、國家から尊重や獎勵を加へ

られることのない私人であつた。かくの如く、民衆の文學と、傳統に囚はれた言葉の技術家や學者の文學と、個人中心の文學と、超個人的精神の文學とは、分離して互に影響しあふことすら稀であつた。我が國の文學に深遠偉大なものの乏しいのは、そのためである。私は、窮極は、個性に生きようとする傾向と、全體に生きようとする傾向とに歸することの出来る、上述の思潮の合流の中に、國民的文學を見出さうとするものであるが、この思想が、各自にはなればなれの路をとつてゐる間は、我が國民的文學の觀念も朦朧たさざるを得ないと信ずる。このはなれへになつてゐる思潮の合流は、たゞ人間性の觀念のうちに於てのみ可能であらう。

明治以後の文藝の發達は、極東の海上に國を鎖した狹隘な島國的根性をすて、世界的思潮のうちに生きようとする努力によつてなされた。明治以後の文學の展開は、江戸時代よりも、寧ろ奈良時



代から鎌倉時代に至る迄のそれに類似してゐる。文學の展開には一定の秩序があつて、その順序は各國の文學を通じて變るものではないが、社會の状態や推移の遲速によつて特色づけられる。明治の文學は、敘事文學に屬する政論及び政治小説を以て始まり、二十年頃から主情主義の文學が起り、感情に深まることによつて人間性の觀念を呼びさまし、新しい詩歌がこゝに創始せられた。そして主情主義のロマンスから、人生を反省する自然主義の小説となり、精神的展開を主題とする現今の文學となつた。最近の半世紀間の文學は、浮薄な摸倣や、新奇を競ふ流行や、島國的に狹隘な見解より生ずる流派や、急激に變遷する時代に對する反動等のため、錯雜し不統一を極めてゐるやうであるが、靜かにその推移の跡を眺めると、全體を統率してゐる、根柢に潜む力のあることを感ずる。この統率力は人間性の觀念である。かの國粹主義も、耽美主

義も、本能主義も、宗教的文學も、この人間性の觀念に基礎づけられ、その一面の表現である時、現代の文藝として力を有する。今日の文藝の發達は、人間性への深まり、人間性のより廣き展望であると言ふことが出來、この傾向に逆行するものは、非現代的と考へられてゐる。私はこの點から國民的文學が世界的文學に近づきつゝあると信ずる。

(文學序説)



# 日本文學年表略

(近世—現代)

○書名・人名は、ほゞ年代順に排列し、その不明なものは推定によつた。但し、現代は文學運動に携つた順序に人名を排列した。

天 皇 (御在位)	作 者	作者略解	作 品	説
後陽成 (二二四六—二二七一) 天正・文祿・慶長	細川幽齋 (慶長十五年歿)	歌人。	詠歌大概抄	詠歌大概の註釋書。天正十四年成。
後水尾 (二二七一—二二八九) 慶長・元和・寛永				
明 正 (二二八九—二三〇三) 寛永				
後光明 (二三〇三—二三一四) 寛永・正保・慶安・承應	松永貞徳 (承應二年歿)	俳人。	新增犬筑波集	俳諧集。澁川・油糟の二書より成る。寛永二十年刊行。
後 西 (二三一四—二三三三) 承應・明暦・萬治・寛文				



天皇(御在位)

靈元 (二三三—二三四七)

寛文・延寶・天和・貞享

東山 (二三四七—二三六九)

貞享・元祿・寶永

作者

作者略解

作品

解説

説

西山宗因  
(天和二年歿)

俳人。

西翁十百韻  
萬葉集管見

俳諧集。延寶元年刊行。  
萬葉集の註釋書。

井原西鶴  
(元祿六年歿)

俳人・浮世草子作者。

日本永代藏  
世間胸算用

浮世草子。貞享五年刊。  
浮世草子。元祿五年刊。

松尾芭蕉  
(元祿七年歿)

俳人。

奥の細道  
芭蕉七部集

紀行。  
俳諧集。蕉門の人々の作。冬の日・春の日・曠野・心さ・猿蓑・炭俵・續猿蓑を收む。

徳川光圀  
(元祿十三年歿)

文化指導者。  
國學者。

大日本史  
晚花和歌集  
萬葉代匠記  
和字正濫抄

神武天皇より後小松天皇に至る本紀傳以下の列傳體の史書。  
長流の歌文集。天和三年刊。  
萬葉集の註釋書。  
假名遣についての研究書。元祿六年成。

内藤丈草  
(寶永元年歿)

俳人。

去來抄  
源氏物語湖月抄  
枕草紙春曙抄

俳論書。安永四年刊。  
源氏物語の註釋書。  
枕の草子の註釋書。

中御門 (二二六九—二二九五)

寶永・正徳・享保

戸田茂睡  
(寶永三年歿)

國學者。

梨本集  
五元集

歌論書。元祿十一年成。  
句集。延享四年刊。

服部嵐雪  
(寶永四年歿)

俳人。

玄峯集

句集。寛延三年刊。

貝原益軒  
(正徳四年歿)

儒者。

益軒十訓  
風俗文選

教訓書。  
芭蕉及びその門流の俳文を集めたもの。

山口素堂  
(享保元年歿)

俳人。

出世景清  
國姓爺合戦

淨瑠璃。  
淨瑠璃。

近松門左衛門  
(享保九年歿)

淨瑠璃作者・脚本作者。

折焚く柴の記  
東雅

自敘傳。享保元年成。  
語學書。

新井白石  
(享保十年歿)

儒者。

和漢文操  
駿臺雜誌

俳文集。享保八年成。  
隨筆集。享保十七年成。

各務支考  
(享保十六年歿)

俳人。

春葉集  
鬼貫句選

春満の家集。  
句集。明和六年刊。



天皇(御在位)

作者

作者略解

作品

解

説

桃園 (二四〇七—二四二二)

延享・寛延・寶曆

紀海 (寛保二年歿)  
八文字屋自笑 (延享二年歿)

淨瑠璃作家。  
浮世草子作者。

荷田在滿 (寶曆元年歿)

國學者。

竹田出雲 (寶曆六年歿)

淨瑠璃作者。

柳澤淇園 (寶曆八年歿)

文章家。

後櫻町 (二四二二—二四三〇)

寶曆・明和

賀茂眞淵 (明和六年歿)

國學者・歌人。

國意考  
歌意考  
萬葉考  
冠辭考

歌論書。  
枕詞の研究書。寶曆七年成。  
萬葉集の註釋書。寶曆十年成。  
歌論書。明和元年成。  
日本精神論。明和二年成。

後桃園 (二四三〇—二四三九)

明和・安永

田安宗武 (明和八年歿)

國學者・歌人。

炭太 (明和八年歿)

俳人。

栗柯亭木端 (安永二年歿)

狂歌師。

歌體約言  
太祇句選

歌論書。延享三年成。  
句集。明和九年刊。

光格 (二四三九—二四七七)  
安永・天明・寛政・享和・文化

建部綾足 (安永三年歿)

俳人・歌人・讀本作者・畫家・國學者。

本朝水滸傳  
日本書紀通證  
和訓栞

讀本。  
日本書紀の註釋書。寶曆十二年刊。  
國語の辭書。安永六年刊。

富士谷成章 (安永八年歿)

語學者。

插頭抄  
脚結抄

語學書。明和四年成。  
語學書。安永二年成。

平賀源内 (安永八年歿)

滑稽本・淨瑠璃作者・博物學者・文章家。

常山紀談  
古言梯

戰國時代の名將傑士の言行に關する雜談を集めたもの。  
假名遣辭書。明和元年成。  
俳文集。

横井也 (天明二年歿)

歌人。

鷄衣

俳文集。

谷口蕪村 (天明三年歿)

俳人・畫家。

新花摘  
蕪村七部集

俳句・俳文集。安永六年成。  
俳諧集。菊屋太兵衛等編。文化五年刊。

大島蓼太 (天明七年歿)

俳人。

蓼太句集

句集。安永六年刊。

高井几董 (寛政元年歿)

俳人。

誹風柳多留

川柳集。柄井川柳選。初編明和二年刊。

柄井川柳 (寛政二年歿)

川柳の點者。

曉臺句集

句集。文化六年刊。

加藤曉臺 (寛政四年歿)

俳人。



天皇(御在位)

作者

作者略解

作品

解

説

小澤蘆庵  
(享和元年歿)

歌人・歌學者。  
國學者。

六帖詠草

歌集。文化八年刊。

本居宣長  
(享和元年歿)

國學者。

古事記傳

古事記の註釋書。寛政十年成。

荒木田久老  
(文化元年歿)

國學者。

古今集遠鏡

古今和歌集の註釋書。寛政六年成。

橋南  
(文化二年歿)

文章家。

隨筆集

寛政六年成。

伴蒿  
(文化三年歿)

文章家。

源氏物語櫛玉

源氏物語の註釋書。寛政八年成。

橋千  
(文化五年歿)

歌人。

萬葉考槻落葉

萬葉集の註釋書。天明八年成。

上田秋成  
(文化六年歿)

國學者・歌人・浮世草子・讀本作者。

東遊記・西遊記

紀行。

村田春海  
(文化八年歿)

國學者・文章家。

閑田文草

文集。

山東京傳  
(文化十三年歿)

國學者・文章家。

萬葉集略解

萬葉集の註釋書。寛政八年成。

堀保巳  
(文化十四年歿)

國學者。

うけらが花

歌文集。明和二年成。

松平定信  
(文政十二年歿)

文章家。

雨月物語

讀本。明和五年成。

小林立茶  
(文政十年歿)

俳人。

藤篋冊子

歌文集。明和二年成。

富士谷御杖  
(文政六年歿)

歌人・國學者。

琴後集

歌文集。文化七年刊。

清水濱臣  
(文政七年歿)

文章家。

忠臣水滸傳

讀本。寛政十年刊。  
我が國古今の圖書を集成した一大叢書。  
文政二年完成。

鶴屋南北(四代)  
(文政十二年歿)

脚本作家・合卷作者。

群書類從

我が國古今の圖書を集成した一大叢書。  
文政二年完成。

石川雅望  
(天保元年歿)

國學者・狂歌師。

花月草紙

隨筆集。

良寛  
(天保二年歿)

歌人。

おらが春

俳書。文政二年成。

十返舎一九  
(天保二年歿)

滑稽本作者。

東海道四谷怪談

脚本。

頼山陽  
(天保三年歿)

儒者・詩人。

良寛和尚和歌集

良寛の家集。

柴田鳩翁  
(天保十年歿)

心學家。

東海道中膝栗毛

滑稽本。初編明和二年刊。

柳亭種彦  
(天保十四年歿)

讀本・草雙紙作者。

日本外史

源平二氏以下徳川氏に至る武家の歴史。

平田篤胤  
(天保十四年歿)

國學者。

鴟翁道話

心學書。

香川景樹  
(天保十四年歿)

歌人。

修紫田舎源氏

合卷物。文化十二年初編刊。

爲永春水  
(天保十四年歿)

人情本・合卷・讀本作者。

古史微開題記

國學書。文化八年成。

式亭三馬  
(文政五年歿)

草雙紙・滑稽本作者。

浮世風呂

滑稽本。文化五年刊。

蜀山人  
(文政六年歿)

狂歌・洒落本・滑稽本作者。

浮世床

滑稽本。文化八年刊。

富士谷御杖  
(文政六年歿)

歌人・國學者。

古事記燈

古事記の研究書。文化五年刊。

清水濱臣  
(文政七年歿)

文章家。

泊泊文集

隨筆集。

小林一茶  
(文政十年歿)

俳人。

おらが春

俳書。文政二年成。

松平定信  
(文政十二年歿)

文章家。

花月草紙

隨筆集。

鶴屋南北(四代)  
(文政十二年歿)

脚本作家・合卷作者。

東海道四谷怪談

脚本。

石川雅望  
(天保元年歿)

國學者・狂歌師。

花月草紙

隨筆集。



天皇(御在位)

孝明 (二五〇六一—二五二六)  
弘化・嘉永・安政・萬延・  
文久・元治・慶應

岸本由豆流 (弘化三年歿) 伴信友 (弘化三年歿)	國學者	土佐日記考證 比古婆衣	土佐日記の註釋書。文化十二年成。 隨筆集。弘化四年初編刊。
小山田與清 (弘化四年歿) 瀧澤馬琴 (嘉永元年歿)	國學者 讀本・草雙紙作者	椿説弓張月 南總里見八犬傳	讀本。文化三年成。 讀本。第一輯文化十一年刊。
橘守部 (嘉永二年歿) 加納諸平 (安政四年歿) 鹿持雅澄 (安政五年歿)	國學者	稜威言別 柿園詠草	弘化元年成。
熊谷直好 (文久二年歿) 鈴木重胤 (文久三年歿) 萩原廣道 (文久三年歿)	國學者 國學者 國學者	萬葉集古義 浦の汐貝 日本書紀傳	萬葉集の註釋書。天保十一年成。 歌集。弘化二年成。 日本書紀の註釋書。
中島廣足 (元治元年歿) 平賀元義 (慶應元年歿)	國學者 歌人	檜園集 平賀元義集	歌文集。天保十年刊。 歌集。
大隈言道 (明治元年歿)	歌人	草徑集	歌集。文久三年刊。

井手曙寛 (明治元年歿) 井上文雄 (明治四年歿) 八田知紀 (明治六年歿)	歌人 歌人 歌人	志濃夫廼舍歌集 調鶴集 しのぶぐさ	歌集 歌集 歌集
---	----------------	-------------------------	----------------

現

代

福澤諭吉 (明治三十四年歿) 假名垣魯文 (明治二十七年歿) 中村正直 (明治二十四年歿) 古河默阿彌 (明治二十六年歿) 井上哲次郎	思想家・教育家 戲作者・新聞記者 學者 狂言作者 評論家 新聞記者・政治家	世界國盡 學問ノススメ 西洋道中膝栗毛 西國立志編 島衛月白浪 新體詩抄 經國美談 春日局	地誌。世界の歴史・地理を七五調を以て記したものである。明治二年刊。 學問の立場を明かにしたもの。明治五年刊。 滑稽本。明治三年初編刊。 サムエル・スマイルズの自助論の翻譯。明治四年刊。 脚本。明治十四年初演。 新體詩集。外山正一・矢田部良吉共著。明治十五年刊。 小説。前篇明治十六年刊。後篇十七年刊。 戯曲。明治二十四年初演。
矢野龍溪 (昭和六年歿) 福地櫻痴 (明治三十九年歿) 坪内逍遙 (昭和十年歿)	新聞記者 小説家・脚本作家 小説家・劇作家・評論家	小説神髓 當世書生氣質 桐一葉	小説論。明治十八年刊。 小説。明治十八年刊。 戯曲。明治二十九年刊。

明治 (二五二七—二五七二)  
慶應・明治



天皇(御在位)

作者

作者略解

作品

解

說

東海・散士 (大正十一年歿) 末廣・鐵腸 (明治二十九年歿) 徳富・蘇峰	二葉亭四迷 (明治四十二年歿)	山田・美妙 (明治四十三年歿) 三宅・雪嶺 (明治三十六年歿)	尾崎・紅葉 (明治三十六年歿)	饗庭・篁村 (大正十一年歿)
小説家・政治家。 新聞記者・小説家。 新聞記者・評論家。	小説家。	小説家・詩人・評論家。 思想家。	小説家。	小説家・劇評家。
啓手鳥狐城落月 佳人之奇遇 雪中梅 國民之友 近世日本國民史	浮雲 平凡	新體詞選 想痕	孝女白菊の歌 ことばの泉 日本文學全書	伽羅枕 金色夜叉
戯曲。明治三十年發表。 政治小説。明治十八年刊。 政治小説。明治十九年刊。 社會評論を主とした雑誌。明治二十年創刊、三十二年廢刊。 歴史。大正七年第一編刊。	小説。明治二十年初篇刊。 小説。明治四十一年發表。	詩集。明治十九年刊。 評論集。明治十九年刊。	長篇敘事詩。明治二十一年發表。 國語辭典。明治二十九年成。 叢書。萩野由之・小中村義象合編。全二十四冊。明治二十三年から刊行。二十五年終刊。	小説。明治二十二年發表。 小説。明治三十一年から發表。

幸田露伴	森鷗外 (大正十一年歿)	木村正 (大正二年歿) 佐佐木信綱	北村透谷 (明治二十七年歿) 内田魯庵 (昭和四年歿)	正岡子規 (明治三十五年歿)
小説家。	小説家・戯曲家・評論家・翻譯家。	國文學者。	評論家。	俳人・歌人。
一口劍 五重塔 舞興詩人 即興詩人 高瀨舟	萬葉集美夫君志 日本歌學全書 心の花 思の草 日本歌學史 國文學的文獻學的 研究	蓬萊曲 罪と罰 ホトトギス 俳人蕪村 病床六尺		
小説。明治二十三年發表。 小説。明治二十四年發表。	小説。明治二十三年發表。 アンデルセンの小説。明治二十五年發表。 小説。大正五年發表。 萬葉集註釋書。明治三十四年。卷一刊。 和歌の叢書。佐々木弘綱共編。明治二十三年より刊行。 短歌雜誌。竹柏會の機關雜誌。明治三十一年創刊。 歌集。明治三十六年刊。 歌學史。明治四十二年刊。 國文學研究書。昭和十年刊。	劇詩。明治二十四年發表。 ドストイェフスキーの小説。明治二十五年刊。 俳句雜誌。明治三十年創刊。 俳論。明治三十年發表。 隨筆。明治三十五年刊。		



天皇(御在位)

作者

作者略解

作品

解

說

高橋山樗牛 (明治三十五年歿)	評論家。	瀧口入道	小説。明治二十七年發表。
泉鏡花	小説家。	高野聖	小説。明治三十三年發表。
川上眉山 (明治四十一年歿)	小説家。	ふところ日記	紀行。明治三十年發表。
樋口一葉 (明治二十九年歿)	小説家。	にごりえ	小説。明治二十八年發表。
大町桂月 (大正十四年歿)	文學者。	たけくらべ	小説。明治二十九年發表。
徳富蘆花 (昭和二年歿)	小説家。	關東の山水	紀行文集。
與謝野寬 (昭和十年歿)	詩人・歌人。	不如歸	小説。明治三十一年發表。
島崎藤村	詩人・小説家。	自然と人生	文集。明治三十三年刊。
土井晚翠	詩人。	天地玄黃	詩歌集。明治三十年刊。
芳賀矢一 (昭和二年歿)	國文學者。	破戒	詩集。明治三十年刊。
伊藤左千夫 (大正二年歿)	歌人・小説家。	嵐	小説。明治三十九年刊。
		天地有情	小説。昭和元年發表。
		國文學史十講	詩集。明治三十二年刊。
		左千夫歌集	文學史。明治三十二年刊。
			歌集。大正九年刊。

河井醉茗	詩人。	無弦弓	詩集。明治三十四年刊。
國木田獨步 (明治四十一年歿)	小説家。	武藏野	詩文集。明治三十四年刊。
與謝野晶子	歌人。	運命論者	小説。明治三十五年發表。
薄田泣菫	詩人・隨筆家。	みだれ髪	歌集。明治三十四年刊。
上田敏 (大正五年歿)	詩人・評論家。	白羊宮	詩集。明治三十九年刊。
蒲原有明	詩人。	詩聖ダンテ	ダンテの紹介。明治三十四年刊。
野口米次郎	詩人。	海潮音	譯詩集。明治三十八年刊。
夏目漱石 (大正五年歿)	小説家。	春鳥集	詩集。明治三十八年刊。
綱島梁川 (明治四十年歿)	評論家・思想家。	二重國籍者の詩	詩集。大正十年刊。
藤岡作太郎 (明治四十三年歿)	國文學者。	吾輩は猫である	小説。明治三十八年發表。
窪田空穂	歌人。	草枕	小説。明治三十九年發表。
櫻井忠溫	隨筆家。	明暗	小説。大正五年發表。
高濱虛子	俳人・小説家。	國文學全史	文學史。明治三十八年刊。
		平安朝篇	文學史。明治三十八年刊。
		肉彈	小説。明治三十八年刊。
		俳諧師	小説。明治四十一年發表。



天皇(御在位)

作者

作者略解

作品

解

說

尾上柴舟	歌人。	柿二つ	小説。大正四年發表。
相馬御風	詩人・評論家。	靜夜	歌集。明治四十年刊。
田山花袋 (昭和五年歿)	小説家。	御風詩集	詩集。明治四十一年刊。
上田萬年 (昭和十二年歿)	國文學者。	蒲團	小説。明治四十一年發表。
松井簡治	國文學者。	大日本國語辭典	國語辭典。上田萬年・松井簡治共編。大正四年。大正八年刊。
永井荷風	小説家。	ふらんす物語	小説。明治四十二年刊。
島村抱月 (大正七年歿)	評論家・新劇運動家。	新美辭學	修辭學。明治三十五年刊。
北原白秋	歌人・詩人。	邪宗門	詩集。明治四十二年刊。
三木露風	詩人。	水墨集	詩集。大正十二年刊。
谷崎潤一郎	小説家。	白南風	歌文集。昭和十年刊。
前田夕暮	歌人。	蘆刈園	詩集。明治四十二年刊。
鈴木三重吉 (昭和十一年歿)	小説家。	原生林	小説。昭和七年發表。
		小鳥の巢	歌集。大正十四年刊。
			小説。明治四十三年發表。

一四

大正 (二五七二―二五八六)

大正

若山牧水 (昭和三年歿)	歌人。	別離	歌集。明治四十三年刊。
長塚節 (大正四年歿)	歌人・小説家。	土千里	小説。明治四十三年發表。
河東碧梧桐 (昭和十二年歿)	俳人。	三梧桐句集	紀行。明治四十三年刊。
石川啄木 (大正元年歿)	歌人。	一握の砂	句集。大正五年刊。
岡本綺堂	劇作家。	悲しき玩具	歌集。明治四十三年刊。
荻原井泉水	俳人。	修禪寺物語	歌集。大正元年刊。
徳田秋聲	小説家。	層雲	戲曲。明治四十四年發表。
小山内薫 (昭和三年歿)	劇作家。	第一の世界	俳句雜誌。明治四十四年創刊。
厨川白村 (大正十二年歿)	評論家。	森有禮	小説。明治四十四年發表。
志賀直哉	小説家。	近代文學十講	戲曲。大正十年發表。
武者小路實篤	小説家。	暗夜行路	戲曲。大正十年發表。
齋藤茂吉	歌人。	その妹	小説。大正四年發表。
		赤光	戲曲。大正四年發表。
			歌集。大正二年刊。

日本文學年表略

一五



天皇(御在位)

作者

作者略解

作品

解説

説

木下利玄  
(大正十四年歿)

島木赤彦  
(大正十五年歿)

芥川龍之介  
(昭和二年歿)

倉田百三

佐藤春夫

吉田絃二郎

菊池寛

阿部次郎

室生犀星

西條八十

賀川豊彦

歌人。

歌人。

小説家。

劇作家・評論家。

小説家。

小説家・劇作家。

評論家・思想家。

詩人・小説家。

詩人。

宗教家。

柿本人麿

銀路

一

太虚集

歌道小見

羅生門

出家とその弟子

田園の憂鬱

島の秋

父歸る

無名作家の日記

三太郎の日記

愛の詩集

砂金

死線を越えて

歌人研究書。昭和九年刊。

歌集。大正三年刊。

歌集。大正十三年刊。

歌論集。大正十三年刊。

小説。大正四年發表。

戯曲。大正五年發表。

小説。大正七年發表。

小説。大正二年發表。

戯曲。大正六年發表。

小説。大正七年發表。

感想集。大正七年刊。

詩集。

詩集。大正八年刊。

小説。大正九年發表。

今 上 (二五八六)

昭和

中村吉藏

和辻哲郎

山本有三

土居光知

里見弴

豊島與志雄

古泉千櫻  
(昭和二年歿)

横光利一

戯曲家。

評論家。

戯曲家。小説家。

英文學者。

小説家。

小説家。

歌人。

小説家。

井伊大老の死

古寺巡禮

海彦山彦

文學序説

多情佛心

人間繁榮

川のほとり

日輪

戯曲。大正九年發表。

感想集。大正八年刊。

戯曲。

文學論。大正十一年刊。

小説。大正十一年刊。

小説。大正十三年發表。

歌集。大正十四年刊。

小説。大正十二年發表。



昭和三十一年一月廿一日

# 文部省檢定

中學國語教科書 實業學校國語教科書

昭和十二年七月十五日印刷  
昭和十二年七月二十日發行  
昭和十二年十二月廿三日訂正再版印刷  
昭和十二年十二月廿五日訂正再版發行



## 發行所

東京市神田區錦町二丁目七番地  
大阪府南區順慶町通一丁目五十三番地

### 湯川弘文社

新制國語讀本（全十冊）

定價各金六拾錢

編者 佐佐木信綱

編者 武田祐吉

東京市神田區錦町二丁目七番地

發行者 湯川松次郎

大阪府西區幸町通二丁目三番地

印刷者 岩岡忠一



中華民國二十一年一月廿一日

### 文匯書報室

中華書局發行所 廣東路

發行所



中華民國二十一年一月廿一日  
廣東路  
中華書局發行所

廣東路

發行所

發行所

發行所

發行所

廣東路

發行所



